※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

＜エントリーシート＞

※ 事 務 局 記 入 欄

No.：C - 1

部門

3．校内研修　部門

学校名・氏名

守谷市立守谷中学校・黒井孝広

活動名　主タイトル（12 文字以内）　副タイトル（16 文字以内）
※どのような課題をどのような手法で解決したのか、わかりやすく伝える案件名を記入してください。

参画意識の向上を目指して
～教科の枠を超えた授業研究を通して～

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

新学習指導要領において，教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントを行うことが求められている。その中でも教科等横断的な視点に基づいた授業研究を進めていくことで，教科担任制である中学校において，教科の枠を超えた教職員同士の協働性やカリキュラム・マネジメントに対する参画意識を高めていくことをねらいとして，校内研修を企画・運営することを目指した。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

教職員の参画意識を「自律性」とそれを前提とした「協働性」の２つからなるものと捉え，それぞれを高めていくためのワークショップ型研修を企画・運営した。まずは「守谷中版視覚カリキュラム表」を活用して，担当教科と他教科・領域とのつながりを捉えることで，自分の授業と自校の取組がどのようにつながっているかを自覚した上で授業研究に取り組めるようにした。また，思考ツールを活用して，校内研究の研究主題を全体で共有したり，自分の授業と研究主題との関連性を見いだしたりすることで協働性を高めるようにした。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

年度初めに校内研究の主題である「目指す生徒像（学びの手ごたえを実感する生徒）」について教職員で意見交流を行い，共有化を図った（写真１・資料１）。次に「守谷中版視覚カリキュラム表」を活用して，教科等横断的な視点に基づいて，学習内容や育てたい資質・能力における各教科・領域間のつながりを見出した（写真２・資料２）。見出したつながりを基に，研究部による「社会科と美術科」「国語科と美術科，学校行事」をそれぞれ関連させた提案授業を行った（写真３・４・５）。異なる教科担当者による授業研究の取組が実現するとともに，教科の枠を超えての相互授業参観を展開する契機をつくることにつながった。 ７月に実施した校内での公開授業の際には，各自の取組における，研究主題に迫るための手立ての有効性を検証し合うワークショップ型研修を行った（写真６・資料３）。８月には「守谷中版視覚カリキュラム表」を活用して，１学期の授業実践についての振り返りと，２・３学期の授業構想を練る研修を行った（写真７）。

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

ワークショップ型研修を取り入れることで，互いの考えを知ることができてよかったという声を聞くことができた。意見交流の際には「数学では…」「体育では…」「技術では…」といった担当教科による考え方の違いなどが出されていた。日々の授業でも「社会科では○○について学習しているそうだけど…」と生徒に話す他教科の教職員の姿が見られた。担当教科以外の取組を知ることで，教職員の視野の広がりにつながっていることが窺えた。
自分の担当教科で学習していることが他教科においても役に立つ，活用されていることを知ったことにより，日々の授業づくりに大きな影響を与えている様子が見られた。

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

○「守谷中版視覚カリキュラム表」を活用することで，教職員一人一人が教育課程（カリキュラム）全体を俯瞰的に見ることができ，授業づくりにおける視野の広がりにつながった。
○目標の共有化を図り，教職員同士の意見交流の場として校内研修の時間を位置付けることで，校内研究の方向性や取組状況を共有し，協働性を高めることにつながった。
○授業を通して，教職員一人一人の教育課程経営に対する参画意識が高まってきた。

＜写真、図表添付欄＞

写真 1

写真 2

写真 3

写真 4

写真 5

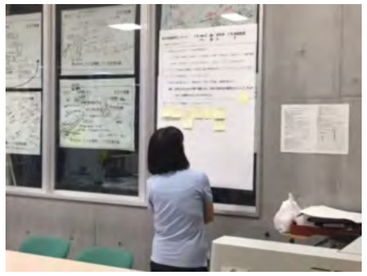
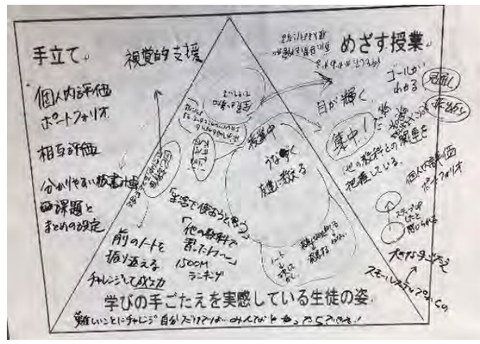


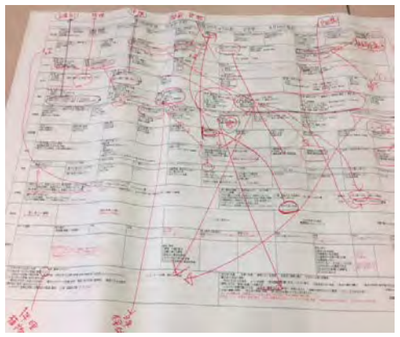
写真 6

写真 7

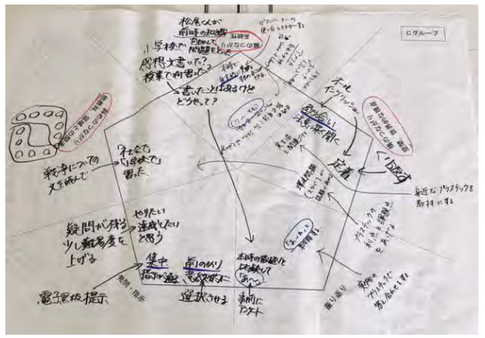
資料 1



資料 2



資料 3



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

（様式 1）

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C - 2**	部門 校内研修	学校名・氏名 福井県　福井市足羽中学校
	活動名 家庭・地域の教育力向上 ～『家庭教育スタンダード』の作成～ ※どのような課題をどのような手法で解決したのか、わかりやすく伝える案件名を記入してください。	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

全国学力・学習状況調査および福井県学力調査の結果によると、本校の正答率は、下回った設問が多く、学校以外で学習時間・土日の学習時間が十分確保できでいないことや読んだ本の冊数、ニュースを見る頻度、夢や目標をもつ生徒が少ないなど問題点がある。また、宿題を学校で済ませてしまおうとする傾向があり、向上心が低いという指摘があった。授業では自ら発表する生徒は少なく、思考力や判断力を必要とする内容にはすぐに諦めてしまうことが多い。さらに、本校は、２５名（5.82%）を超える生徒が、登校渋りや別室学習、をしている。その多くが、「授業についていけない」「宿題が出せない」などの理由を挙げている。

保護者にとって、9 カ年を見通したスタンダードによる指標は、発達段階に合わせた指導の目安になる。基本的な生活習慣の定着は、家庭の教育力の向上につながる。家庭においてスタンダードの活用は子どもたちの行動を評価することになり児童生徒のちへの意欲が向上する。SNS による友人関係のトラブルやゲーム・スマホ依存などの問題を回避すること（情報環境の整備）は、好ましい学習環境をつくることになる。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

義務教育 9 カ年を見通した「ASUWA 家庭教育スタンダード」（図１）を作成することにより、家庭・地域との連携が深まる。それぞれの立場での役割を理解し責任を持つことにより、教育力が高まり学力を向上させることができるのではないか。」という仮説を立て、実態や要望などを考慮して、校区内全体で連携し歩調合わせ、生活習慣と学習習慣を身につけ、健やかで社会性を身につけた子どもを育てることを目指した。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

足羽中学校区連絡会において、スタンダードを作成する目的で家庭教育部会を創設した。第１回部会（校下小中の学校代表１名と保護者代表２名）では、保護者代表から子育ての現状や課題を中心に、現状把握行い、「家庭教育／家庭生活／情報モラル」の３つの指標をもとにブレーンストーミングによって、意見を付箋紙に書き込んだ。さらに、KJ 法を用い、模造紙に縦軸を発達段階（低学年／中学年／高学年／中学校）横軸として表を作り、原案を作成した。次に、校下小中合同研修会おいて、教員の立場で原案を元に意見を出し合い、素案（図２）にまとめた。第２回部会をでは、素案を整理しスタンダードを完成させた。また、スタンダードの周知方法、開始時期、検証方法など今後の取り組みについて確認した。後期の始業式において、全家庭に、スタンダードと指標の目的とねらいを書いた印刷物を配布し、学校だよりや HP に掲載し、理解と協力を求めた。10 月下旬の教育ウィークを重点取組期間として、実態調査を実施した。取組状況は、学校ごと、発達段階ごとにグラフ化し、保護者の意見はすべて集約した。第３回部会では、取組状況と意見の分析・検証した。取組状況については概ね良好であったが、子どもたちの地域への関わりが不十分であることが指摘された。意見では、「我が家のルール決めのきっかけとなった。」など肯定的な意見が大半だった。改善を求める意見としては、「SNS の使用早期化につながらないような工夫が欲しい」などの意見があった。部会後、取組状況のグラフと意見や感想を集約した印刷物（図３）ものを配布した。第４回部会では、反省と今後の課題について話し合い、次年度の取り組み方や改訂について話し合った。

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

スタンダードを作ったことは、学校からの押しつけではなく家庭を含めた地域ぐるみで児童生徒を育てていく意識を高める第一歩になった。導入前の 27 年７月から年 2 回実施している学校評価の学習意欲、学習習慣（図４）に関する設問で生徒の意識変化についてグラフ化した。いずれ設問も割合が上昇傾向にあり、効果が上がっている。特に、学習意欲に関しては上昇傾向が強く、予習復習や課題提出などの学習習慣の高まりがその裏付けられている。導入当初は、不登校生徒は横ばい状態が続いたが、一昨年度より大幅に減少した。（図５）不登校の理由の大半が、学力不振であり、家庭での学習習慣の定着と生活習慣の確立が不登校の減少につながったと考えられる。

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

・「学力が高くないこと」＝「家庭に問題がある」にならないように、家族や地域住民の子育てに対する悩みを学校側と一緒に考えていくことからからスタートし、協同して作成した。
・校区内小中学校が共通の標準的な指導の目安を示すことで家族や地域住民が生活・学習について、共通理解をもって指導しやすくなった。
・学校、家庭、地域の相互の交流が図られ、三者で子どもたちを育てていくという意識が向上した。
・「生徒指導の重視」＝「教育力の向上」と考え、地域行事への参加やあいさつ、お手伝い、さらに情報モラルの項目を取り入れた。

＜写真、図表添付欄＞

図１

図２

図３

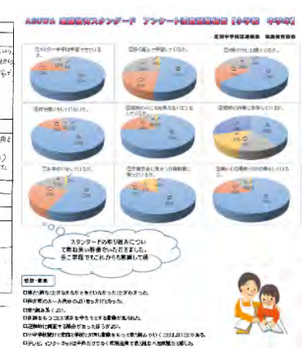


図４（学習意欲）

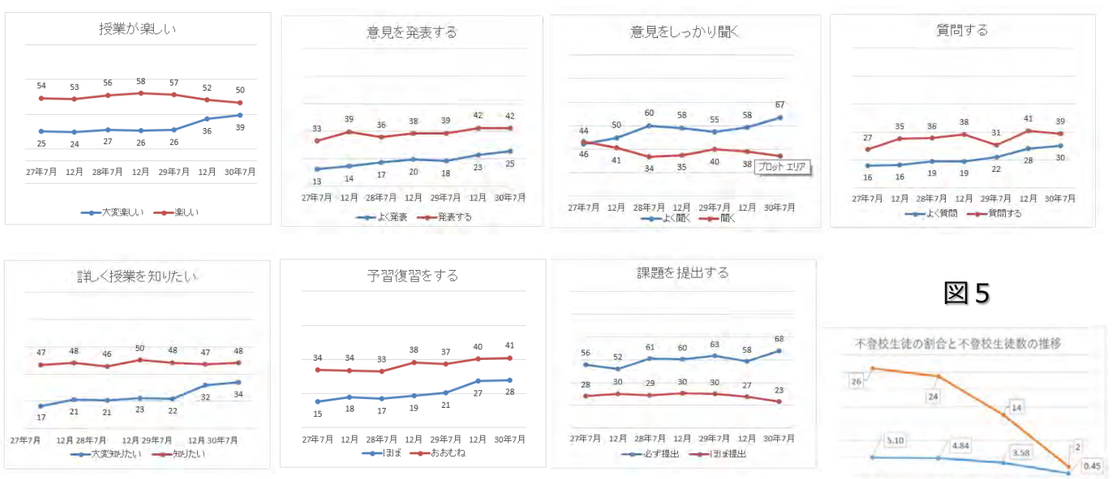
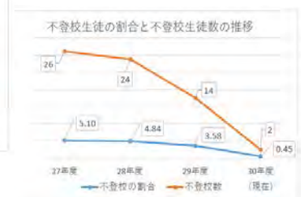


図４（学習習慣）

図５



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

＜エントリーシート＞

※ 事 務 局 記 入 欄

No.：C - 3

部門

平成３０年
第１回次世代リーダー育成研修

学校名・氏名

吉野川市立川島小学校
谷　聡司

活動名

職員会を本当の職員会に　～主体的・対話的で深い学び～

課題の設定：

特別活動の特性（主体的・対話的で深い学びや折り合いによる決定から実践を行う）を生かして，
学校組織マネジメント（業務の見直しや職員間の密なつながり）を行う。

方針・計画：

体験を交えた特別活動の研修　×　職員同士で必ず話さなければならない事柄

⇒ チーム学校としての高まり【議題：「業務のスリム化」を意識し，メリハリをつけよう】

活動内容：

① 全職員から議題を集めて選定を行う。　② 計画委員会で話し合う柱などを考える。

③ それぞれに考えを書いてもらう。　④ 計画委員会で話合いの進め方を考える。

⑤ 職員会として話合いをする。　⑥ 実践を行う。　【詳細は図１】

活動の成果：

・週番制（２人）から日直制（１人）になった。
・古紙の分別を意識して，予算がアップした。
・学習したファイルの引き継ぎを行うことで，４月からのスタートをスムーズに行えるようにした。
・総合・学級活動のワークシートを各学年でまとめることで，転入職員にも分かりやすいようにした。
・月に１回それぞれ個人でノー残業を意識する黒板を設置することになった。
・みんなで意識して声かけしあうことになった。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

① 平成３０年度から全面実施の特別活動を体験しながら学ぶことができる。

② 全員の意見や思いを共有することができる。

③ 業務の改善についての話合い後，全職員で実施できる。

＜写真、図表添付＞

写真１：計画委員会

写真２：話合いの様子

写真３：振り返り

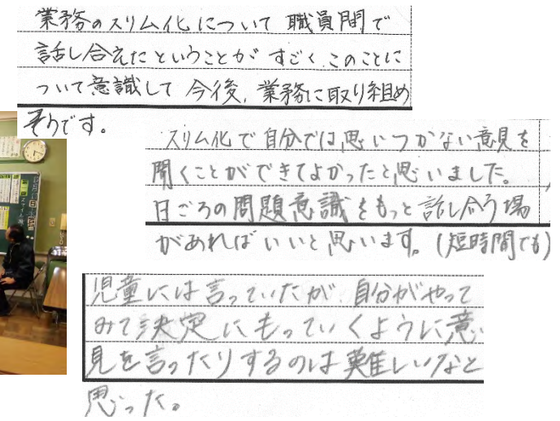
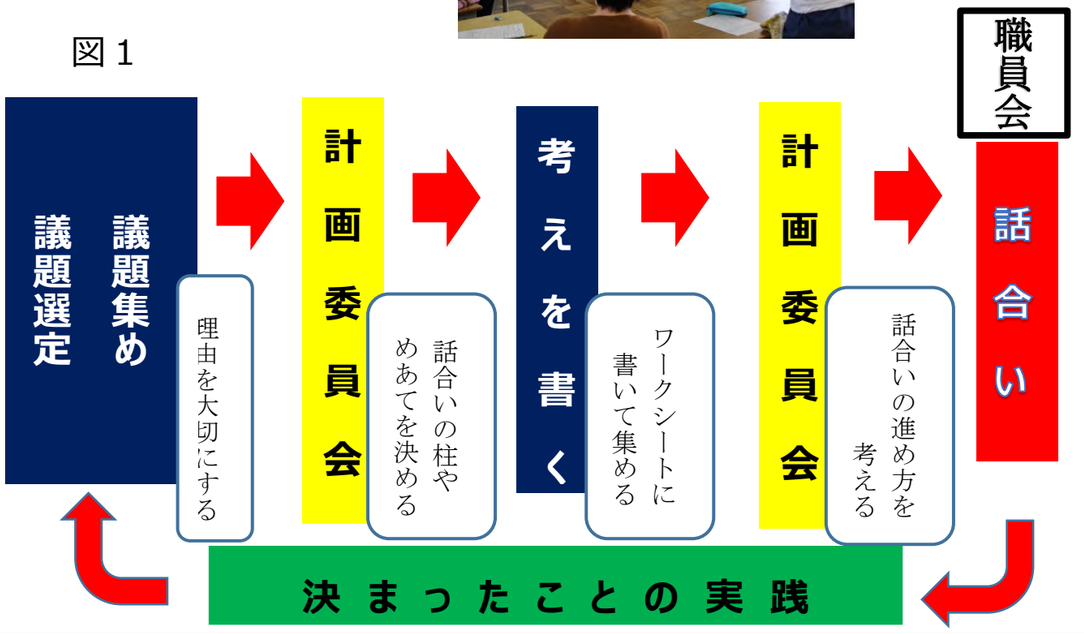


図１



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C - 4**	部門 校内研修部門	学校名・氏名 京都市立下京中学校
	活動名　「学びを深める教育実践」 問いや対話的活動を工夫した授業改善	

課題の設定：

「この授業は何の役に立つの？」ある生徒の授業中の発言によって，本校は授業改善の取組を始めた。５つの中学校が統合してできた本校は，開校以来多くの取組を行ってきた。しかし，その取組が生徒にとって将来に役立つ学びとして伝わっていなかったのではと見直しを進めた。その時以来，全ての教育活動にキャリア教育の視点を取り入れ，この数年はキャリア発達を促し，学びを深めるための授業改善を行っている。

方針・計画：

各授業の中で，効果的にキャリア発達を促す方法として，アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた。特に思考ツールを活用することで，生徒は自分の考えを可視化し，操作・整理することで思考活動が促進される，と同時に対話活動も活発になり授業が活性化する。また，問いを工夫することで生徒は考えることに必然性を感じ，主体的に思考するようになり，より学びが深まっていくと考えた。

活動内容：

「本質的な問い」：必然性があり生徒の探究心を促す教科の単元の本質に迫る「問い」を設定する。
「思考ツール」　：情報やイメージを可視化し，課題に対する個々の捉え方を他者にも自分自身にも分かりやすく整理できる。また，シンプルな図形の枠組みの中で，考えや情報を操作することで対話を活発にし，知識を結び付けることによって学びを深める。
「クロス持ち授業」：全教員が教科授業を複数学年受け持つことによって，教科会を活性化させ，教科の見方・考え方を働かせ，教科で身につけさせたい資質・能力を明確にした授業を構築する。

活動の成果：

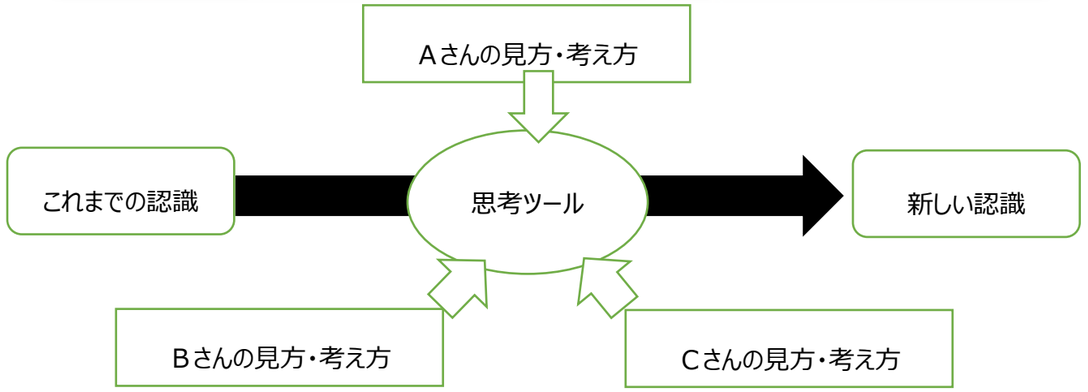
各教科の指導者がこれまでの自分自身の授業法を再考し，アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善に取り組むことができた。「本質的な問い」「思考ツールの活用」等に目を向け，教科会で活発な議論を交わすことにより，学びが深まっている授業が多くなった。本質に迫り深い学びをどのように実現するか，どのように見取るかを教職員同士で議論することにより，教職員間の連携が強まり，組織的に授業改善を進めることができた。
＜思考ツールを活用した授業後の生徒の感想＞
・思考ツールを使うようになって，自分の考えやグラフなどの情報が頭の中で整理しやすくなりました。
・思考ツールを使うことによって，より深く考えたり，班の人と交流したりできるので理解しやすい。
＜生徒質問紙の結果＞
「授業で学習したことは，将来，社会に出たときに役に立つと思いますか？」 H29：70%→H30：75%

アピールポイント（アイディアや工夫）：

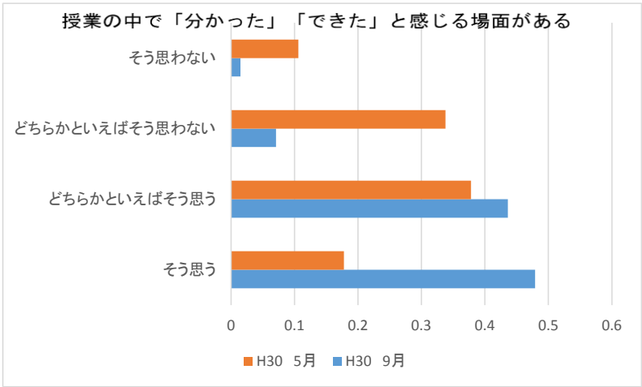
・すべての教育活動をキャリア教育の視点で捉え，身につけさせたい資質・能力を教科ごとに明確にしている。年度初め授業オリエンテーションの中で，教科ごとに身につけたい力を生徒に伝えている。
・学年ごとの各教科単元配列表を，学習内容版と資質・能力版の 2 種類を作成し，カリキュラム・デザインの実現を目指している。
・廊下に思考ツールの紹介を掲示し，思考ツールの有効性に対する生徒への意識の定着を図っている。
・思考ツールを教科授業だけでなく，特別活動や部活動の指導にも取り入れている。

思考ツールを活用し活発になった対話活動

課題解決に向けて思考ツールで考えを整理

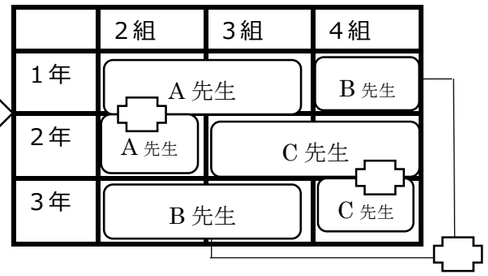


「本質的な問い」について議論する教科会



従来の授業の持ち方

“クロス持ち授業”の持ち方



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞

※事務局記入欄

No.：C－5

部門

校内研修

学校名・氏名

和歌山県海南市立　東海南中学校

活動名

レンタル Teacher 制
小中連携を強化する授業研修

課題の設定：

本校は ３ つの小学校から生徒を迎える。各小学校はそれぞれ特徴を持ち、中１ギャップを取り除く準備を早期の段階から必要であるという課題を抱えている。（資料①）そこで９か年を見通した小学校と協働する指導体制の構築が必要だと考えた。その指導体制を構築しくために別記目標（資料②）を設定して取り組んだ。

方針・計画：

課題解決に向けて、小中連携強化の必要性を教員は実感している。ただ多忙化の中、相互の教員が時間を作ってまで行うほど有益と感じる具体的な連携活動が行われていない。そこで、小学校の先生が苦手とする教科を中学校の教員の専門性を生かして支援していくと同時に、中学校教員は教科指導の力量を高める研修的要素を盛り込んだ取り組みを考えた。

活動内容：

小学校から要請を受けた学年の教科（資料③）に対して、その教科の教員免許を有する中学校教員が小学校に赴き、授業を行う。中学校教員は小学生に授業を行うだけでなく、小学校教員が知りたい・得たい知識や技能を提供する。研修という観点から、一定の条件（資料④）の元で授業を行い、「事前打ち合わせ→授業→事後協議」を行うことで、小中教員の教科を通しての交流を図った。

活動の成果：

○技能教科の中学校教員が専門性を発揮する機会を得たことで、授業づくりについての意欲が高まった。
○小学生を指導することで、配慮を要する生徒に対しての手立てについての意識が中学校教員に高まった。
○図工、体育、音楽を苦手とする小学校の教員（特に若手教員）が、指導技術等を実際に目にしながら研修できた。特に授業計画を遅らせることなく研修できることへの評価が高かった。
○小学生に新鮮な雰囲気を与え、授業へのやる気を高められた。また、次年度入学して来る児童の授業実態や小学校の抱える課題等を中学校の教員が肌で感じることができた。それにより、中学校の職員室で入学して来る小学生の良い点、悪い点等が話題になる機会が増えた。
○児童生徒や教科のことで小中学校職員の交流が、加重負担をあまり感じさせずにできた。
※資料⑤参照

アピールポイント（アイディアや工夫）：

○技能教科を中心に小学校の要請に対して、中学校の専門性を小学校の授業で提供したこと。（小学校教員への研修の機会の提供，中学校の技能科教員の奮起の促進，中学校教員の負担軽減）
○小学校のすべての学年、すべての教科の要請に対して中学校の専門性を提供するようにしたこと。（中学校教員の一体化）
○小学校の授業が遅れないように、教科書授業の一部分を中学校の教員が指導するようにしたこと。（中学校教員の授業力の向上，小中学校教員レベルでの交流，小学校の負担感の軽減）
○中１ギャップに対する対策を早い段階から全職員で協議すること。（計画的な加配教員の申請）

【資料①】３小学校の特徴

K小学校	N小学校	M小学校
児童は落ち着いており、市内では学力が常に上位。地域も教育に関心が高く、協力的。	学年により、児童の落ち着き度にばらつきがあり、市内では学力が常に下位。地域は教育に関心が高く、協力的。	複式学級で、学力は年度により高低変動が大きい。地域は教育に関心が高く、協力的。

【資料②】指導体制構築に向けての目標

３小学校の教員と中学校教員が児童生徒への教科指導や児童生徒の生活指導等で意見交換する場を作る。

・三野上教科部会の構築する
・三野上の児童生徒を９ヵ年で育てる姿をイメージ化し、成長 Can-Do リストを作成する

【資料③】要請を受けた教科

○H29 年度　・図工‥‥水彩風景画（小５，小６）　①デッサン　②水彩　③仕上げ
・体育‥‥市内小学校陸上競技大会に向けて（小６）ボール投げ，ハードル，走り幅跳び等
・▸外国語活動‥‥外国語活動の会話活動（小６）
○H30 年度　・音楽‥‥合唱指導（小４）　混声２部合唱，　器楽指導（小４）
・図工‥‥ポスター画，運動会の絵（小５・小６）　①構図　②着色　③仕上げ
・英語‥‥小学校英語と中学校英語の繋がりを意識した授業（三野上英語部会の発足）

【資料④】レンタルティーチャー制度の条件

・小学校からの要請に対して、小学校教員の研修として実施する。
・レンタルティーチャーの授業実施日の１ヶ月以上前に要請を中学校にするする。（詳細日程は、連絡調整）
・技能教科（音楽、図工、体育）においては、単元の導入→中間→仕上げの時間で実施する。
・技能教科以外は、単元で指導がうまくいかない部分の授業で実施する。
例えば　理科の実験、算数の文章題、英会話活動　など

【資料⑤】レンタルティーチャー制度に対する評価

・講師や採用５年以内の教員に対して、技能教科の指導についての研修として役立った。〔小学校管理職〕
・技能教科の教員が中学校で専門性を発揮させる時間（体育；9 時間/週，音楽・美術；3.3 時間/週）が少ないため、自分の専門性を発揮させる時間が加重負担にならない程度で増えて良い。〔技能教科の中学校教員〕
・小学校生を継続的に指導する中で、指導する小学生の状況が良く理解でき、中学校へ入学して来る際の受け入れ準備がイメージしやすい。（中１ギャップを小さくする手立ての準備）〔指導した中学校教員〕
・３つの小学校の指導スタイルの違いや抱えている課題がよく見えた。〔指導した中学校教員〕
・構図の取り方、水彩画の着色の仕方等を授業指導の中で研修できてよかった。〔小学校教員〕
・ハードルの跳び方の指導の仕方の幅が広がった。〔小学校教員〕
・出前授業のスタイルではなく、小学校の授業計画の中で中学校教員が指導してくれることは、小学校教員の負担感が少ない、児童にも新鮮みを与える授業となった。〔小学校教員〕
・技能教科教員のやる気起こさせる機会となった。小学校の授業づくりに工夫を凝らす姿が見られた。また、授業改善に対して中学校全教員で取り組む雰囲気が高まった。〔中学校管理職〕
・絵やポスター制作等の場面で中学校の美術の教員が実際に小学生に指導する姿を見せることは、若手教員の指導技術研修になるので、美術教員の加重負担にならないように気をつけながら進めてほしい。

〔市教育委員会〕

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

<エントリーシート>	部門　校内研修部門	学校名・氏名　鹿児島県 姶良市立 帖佐小学校
※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C - 6**	活動名	校内研究の推進 ～教育委員会や自主研究団体との連携を通して～

課題の設定：

課題 1：「深い学び」が実現された授業とは，どのような授業なのか。
課題 2：「深い学び」を実現させるために，授業で何を改善すればよいのか。
目　標：「深い学び」について，本校なりに共通理解を図り，授業改善の視点を明確にして「深い学び」が実現される授業を全職員で目指す。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

仮説：　働かせたい見方・考え方を明確にするとともに，自分なりの考えを持ったり，友達と考えを広げ深めたりさせるための手立てを工夫すれば，数学的な見方・考え方が高まる「深い学び」が実現されるのではないか。
方針：　①働かせたい見方・考え方の明確化　②見方・考え方を働かせる手立ての工夫
計画：　5 月 28 日（月）「学びの組織活性化プロジェクト」による県教委・教育事務所・市教委と協働研究
6 月　9 日（土）地区算数部会との連携（地区算数部会に参加）
6 月 22 日（金）県算数部会との連携（県算数・数学教育研究大会に参加）
8 月 21 日（火）NRT 全国標準学力検査分析による本校児童の実態把握
10 月 22 日（月）「学びの組織活性化プロジェクト」による県教委・教育事務所・市教委と協働研究

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

5 月 28 日　指導案検討を通して，理論の練り上げ，手立ての工夫について協議
6 月　9 日「深い学び」に関する研究協議
6 月 22 日「深い学び」に関する実践発表，研究授業の参観
10 月 22 日「深い学び」の実現を目指した研究授業の実践

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

県教委，教育事務所，市教委，県算数部会，地区算数部会等から，情報提供や指導・助言等をいただき，次のような成果を得られた。
① 「深い学び」のイメージをもてない状況からの研究スタートであったが，図 1 のように本校なりに「深い学び」を捉えることができ，実践に向けて研究を推進させることができた。
② 数学的な見方・考え方について，図 2 のように明確化する方法をまとめることができた。
③ 研究授業の実践を通して，写真 1 のように職員の「深い学びの実現」へ向けた研修への関心の高まりがみられた。

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

「深い学び」の捉え方を明確にもつことで，授業改善の視点を「見方・考え方を働かせる授業」と，より具体的に設定することができる。また，子供たちの見方・考え方が，授業前と後で，どのように変容する授業が「深い学び」が実現された授業なのか学習指導案検討の視点も明確になるとともに，研究授業での成果の検証も子供の見方・考え方の変容に着目して行えるようになる。

＜写真、図表添付欄＞

図 1

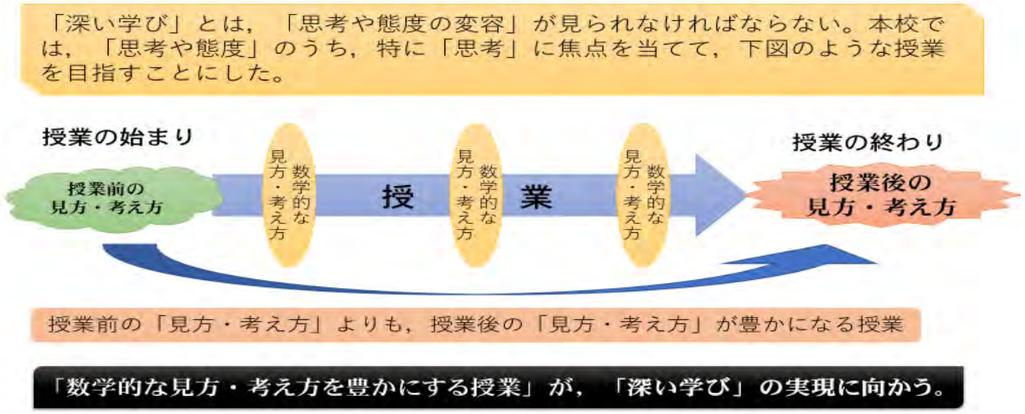


図 2

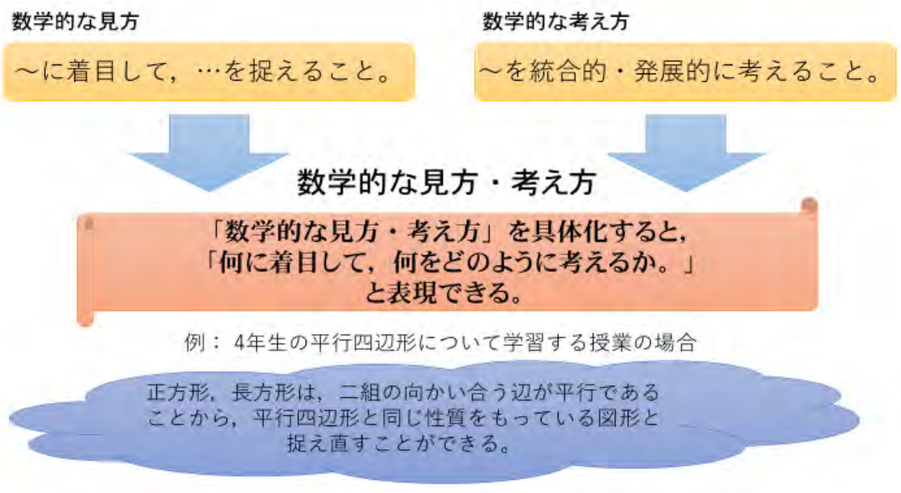


写真 1

平成 30 年 9 月 18 日（火）
職員研修の様子
「3 年算数科学習指導案検討」

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

<エントリーシート> ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C－7**	部門　校内研修部門	学校名・氏名 北広島町立芸北中学校
	活動名 主タイトル（12 文字以内）食育推進体制の充実 副タイトル（16 文字以内）教育活動を関連付けた多面的な取組	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

生徒は，基本的には食べる事には意欲的であり，食への知識・理解，興味・関心もある。しかし，アンケートの結果から意識が態度に結び付いていないことが分かった。（グラフ１）本校では様々な教育活動を通じて食育の実践をしていると思っていたが，アンケートを実施してみると半数以上の教職員が積極的に食育に関わっていないと感じていた。（グラフ２）つまり，食育とは何かを理解して関連性をもった取組ができていないことがわかった。これらの教職員も生徒も意識と行動が一致していないことを課題ととらえた。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

仮説：一人一人の教職員が目的をもって取り組むための「教育活動に関連をもたせる取組の充実」と，多面的に取り組むための「家庭，地域，北広島町教育委員会の取組の連携」、つまり食育推進体制を充実させることで望ましい食生活を実践できる生徒を育成できるであろう。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

1　カリキュラム・マネジメント
　研究部を中心に，食育推進に関わる校内研修を実施。研究主任が，中学校学習指導要領で食育について記載されている部分の抜粋を資料にし，教科の中に食育が位置付いていることを説明。栄養教諭は，授業以外で学校教育活動の中で取り組める食育について説明。その後，各教科担任がそれぞれの教科の単元と食に関する指導の目標６つとの関連付けた年間指導計画を作成。
2　関連を持たせた授業の実施
　２ 年生の指導計画を「教育活動を関連付けていく」という視点で見直し，食に関する指導目標「食事の重要性」「心身の健康」の２つで，特別活動・理科，給食時間の指導・家庭科を関連付けられることが分かった。この計画に基づいて授業を実施。
3　多面的な食育の推進
　指導部と連携し，生徒会活動を通した給食時間の指導を実施。北広島町の実施する給食メニューコンテストに全校生徒で応募。連携型一貫校の高校の農業部の栽培している農作物を給食に使用。

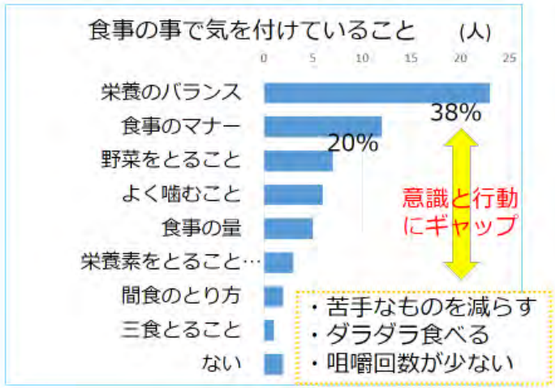
活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

- 生徒アンケート「食事の時にマナーを守っている」の項目に対し，「よく当てはまる」と答えた生徒が増加。自由記述の項目では，「食」への意識について望ましい変化がみられた。（図２）
- 教職員アンケートでは，「食育に取り組んでいる」と肯定的回答をしている職員が増加した。（グラフ３）
　自分の担当教科で食育に取り組んでいるという回答，取り組んだ時間の延べ回答数が増加した。「その他」の項目では，「朝会」「部活」「学級通信」「ＨＰ」「個別指導」などが挙げられた。（グラフ４）

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

- 職員が「気付く」「わかる」校内研修の実施。
- 芸北中学校の研究部・指導部・生徒会活動などの校内体制，隣接する加計高等学校芸北分校の農業部の活動，北広島町が実施する給食メニューコンテストなど，今ある組織などを関連付けた食育の推進。

グラフ１



グラフ２

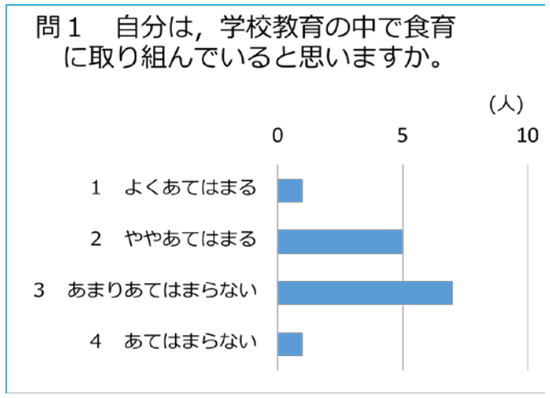
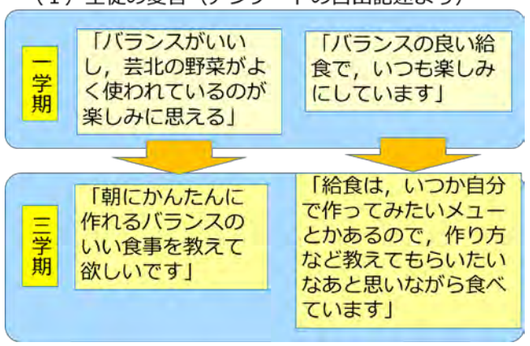


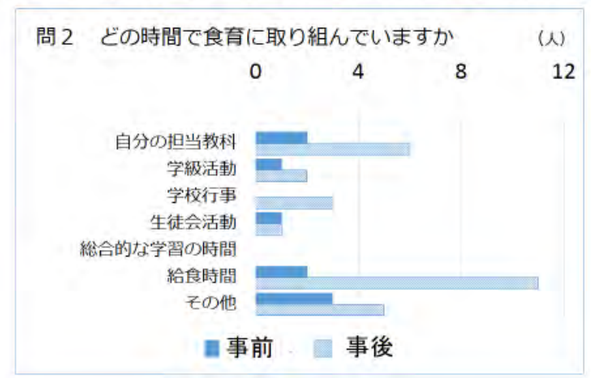
図１

図２



グラフ３

グラフ４



＜エントリーシート＞ ※事務局記入欄 No.： C－8	部門 校内研修　部門	学校名・氏名 鹿児島県姶良市立柁城小学校
	活動名　組織としての学力向上対策 ～思考力・表現力・判断力の育成をめざして～	

課題の設定：子どもたちが成人して社会で活躍する時代は，技術革新により社会構造や雇用環境の変化、ＡＩの活躍など予測が困難な時代となっていくと考えられる。子どもたちに，自分の意見を述べたり，考えを説明したりするなど自分の考えを適切に表現して相手に伝える力を身に付けさせたい。そして，予測困難な社会をたくましく生きていってほしい。そこで，子ども一人一人が習得した知識・技術を活用しながら，主体的に解決していけるような授業を展開する必要があると考えた。また，教員としての資質を高め子どもや保護者・地域住民の期待と信頼に応えるように，創造性あふれる研修活動を行っていくことにした。

方針・計画：

（１）全職員が協働した学力向上対策

（２）本校の教育課題である国語科を中心とした「思考力・判断力・表現力」を育成するための研究

（３）「授業力の向上」を図るための授業を通した実践的な研修

活動内容：

（１）全職員が協働した学力向上対策（図１）
　学力向上担当教員を中核とした推進体制を整備するとともに，組織的に総合的な取組を展開し，学力向上に関するＰＤＣＡサイクルを確立し教師の確かな指導力向上に努めた。全国学力・学習状況調査についての分析をきめ細やかに行い,授業改善を行い,６学年の系統性のある指導に全職員で行った。

（２）　国語科を中心とした「思考力・判断力・表現力」を育成するための研究（図２）
　「確かな読みをもとに，主体的に表現する力を育てる国語科指導法の研究～「読むこと」と「書くこと」を関連付けた指導を通して～」を研究主題として,新旧の学習指導要領を精読し,理論班・授業実践班・資料整備班において,理論の確立,授業改善,言葉あふれる環境整備について研究した。また，他者と自己の言葉による見方・考え方を知る交流活動を深める指導の在り方についても共通理解し，「思考力・判断力・表現力」の育成を目指して研究を深めることができた。

（３）「授業力の向上」を図るための授業を通した実践的な研修（図２）
　授業を通した実践的な研修を積み重ねる中で課題解決的な指導計画の作成や他者と自己の言葉による見方・考え方についての研究を深め,研究の成果について,県内の９０名近い出席のもと研究公開を実施し,発表を行った。

活動の成果

○　学力向上に関するＰＤＣＡサイクルを確立することで,全職員の共通理解が図れ,実践へとつながった。

○　国語科指導法の研究を深めたことで,子どもたちの書く力や自分の考えを主体的に表現する力が向上した。
そして，全国学力・状況調査では,書くことや記述式の正答率が全国平均を大幅に上回ることができた。

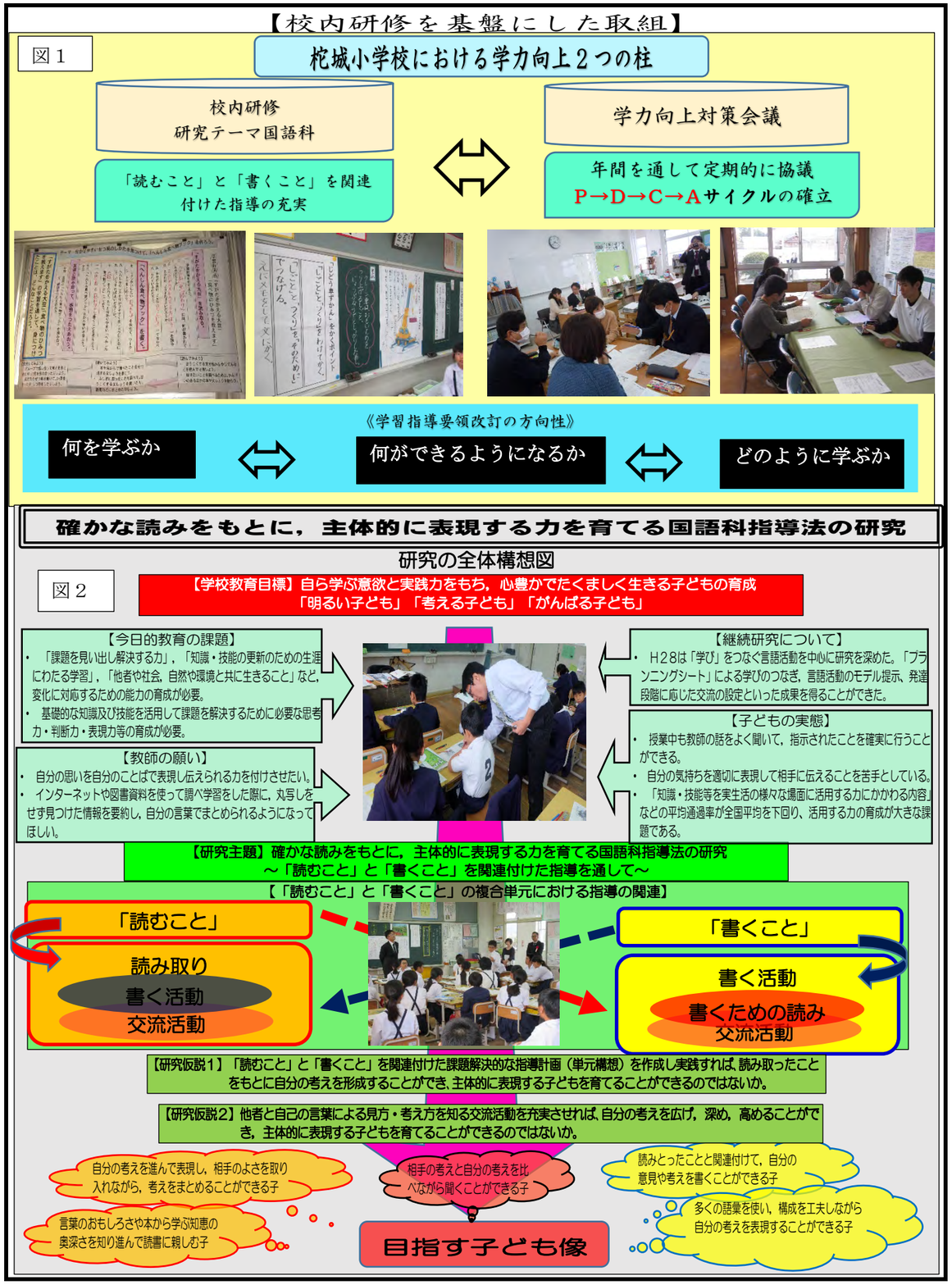
○　研究授業や諸学力検査結果の分析を通した研修が,教員個々の指導力向上につながった。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

○　全国学力・学習状況調査等の学力向上に向けて，子どもたちの実態を分析し，全職員で対策を行った。

○　国語科では，「書くこと」と「読むこと」の関連という先行研究で主体的に表現する子どもの育成を図った。

○　６か年を見通した学習指導の充実，継続した研究授業，全職員の役割を明確にした校内研修及び学力向上対策を推進する取組の充実を図った。



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1 】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C - 9**	部門 校内研修部門	学校名 岩倉高等学校
	活動名 校内若手教員研修 各教員の個の育成と学校組織の強化	

課題の設定：教員自身が成長し続ける意欲向上と環境作り・組織力の強化

授業準備や担任業務など、個人の裁量が大きい仕事が多い。そのため自身を振り返り、成長を続けていく意欲や、仕事をチームとしておこなっているという意識が薄くなりがちになってしまう。そこで入職 4 年目までの教員 28 名と中堅・学年主任・管理職も参加する研修を月に 1 度おこなうことで上記の課題の打開を目指す。

方針・計画：各教員の個の育成と学校組織の強化

若手・中堅・学年主任・管理職という立場や、校務分掌・学年団などの垣根を越えて、1 つのテーマに関して相談し、話し合える風通しのよい環境作りを心がけた。悩み・相談・アドバイスや、様々な視点の共有を通して、各立場における個人の振り返りと、チームで仕事をしているという横のつながりの強化をはかった。

活動内容：①月に 1 度の若手教員研修の実施 ②月に 1 度のフォロワーMTG の実施

①4 年目以下 26 名の若手教員と学年主任、管理職が必ず参加する研修。各回業務についてテーマを掲げ、校内の先輩教員や、講師を招いて講義やディスカッションをおこなう。前期の運営は 3・4 年目の教員がおこない、後期の運営は 1・2 年目の教員がおこなう。

②1 年目 9 名の教員全員に、サポート役のフォロワーをつけ、月に 1 度以上の面談をおこなう。その内容の共有と前回の若手教員研修を受けての振り返りをおこなう。フォロワー9 名と管理職が参加。

活動の成果：①専門性だけでなく、多様性の育成 ②学校というチームとしての意識の芽生え

①研修のテーマは、社会人（挨拶・服装・電話対応など）、教員（授業・生徒指導・行事確認・事務手続きなど）、校外の活動（JICA 青年海外協力隊など）といった 3 つの視点から様々である。社会人や教員の視点については、所属した校務分掌や学年団という垣根を越えた研修により、自身のついていない分掌のことや、学年の動きを把握することができた。結果、生徒指導の統一化や、他の分掌や学年団への理解を深め、組織力の強化にもつながった。また校外の活動の研修テーマでは、教員という仕事や、自身の専門教科などに関わらず広い視野を持ち、多様な価値観を学ぶ大切さを再確認できた。

②若手の教員のみならず、中堅、学年主任、管理職が必ず参加する環境は、学校をそれぞれの立場から支えているという意識が芽生え、風通しのよい環境整備につながった。

アピールポイント（アイディアや工夫）

・若手・中堅・学年主任・管理職といった様々な立場の教員が参加している
・民間企業出身者の教員も多く、様々な経歴を活かしている
・研修テーマにより、他の学校の教員や講師の方の参加がある
・7 年前から継続しており、他の学校にはあまり見られない取り組みである

直近 3 年間の取り組み内容 ※平成 29 年度は初任者採用がなかったため不実施

【平成30年度若手教員研修 実施計画】

月	議題
4月	5月の行事確認・挨拶・服装・生徒指導・電話対応
5月	6月の行事確認・生徒主体について・JICA青年海外協力隊
6月	7月の行事確認・募集広報活動①・生徒のインターンシップ
7月	8・9月の行事確認・募集広報活動②・教員のマナーと身だしなみ
9月	10月の行事確認・前期の振り返り
10月	iPadの活用法・生徒指導上での問題点
11月	総合学習・クロスカリキュラム
12月	帝京平成大学の方を招いての講演（ディスカッション） 予定
1月	アクティブラーニング（実践） 予定
2月	保健衛生関係 予定

【平成28年度若手教員研修 実施計画】

月	議題
4月	岩倉高校の教員として、学校業務（実践編）
5月	保護者対応、電話対応、名刺交換、事務手続き
6月	体育祭での応急処置、文理選択
7月	外部実習、電子黒板の活用と実践例、生徒への面接指導
9月	面接指導（篠原学園 増田先生）
10月	防災、研修の振り返り
11月	アクティブラーニング実践報告、 iPad応用
1月	国際交流、研修の講評
2月	人前に立つこと（尚美ミュージックカレッジ専門学校 滝沢先生）

【平成27年度若手教員研修 実施計画】

月	議題
4月	社会人、教員、授業、HRとは
5月	募集・広報活動、事務手続き、試験・成績
6月	進学指導
7月	教務部、就職指導、前期を振り返って
9月	電子黒板の使用法、新任教員の模擬授業
10月	前期を終えて、部活動指導
11月	女子の生徒指導、保護者対応
12月	キーコンピテンシー
1月	寮の見学

＜JICA 青年海外協力隊の方の講義の様子＞

＜研修中にディスカッションしている様子＞

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C - 10**	部門 校内研修部門	学校名 岩倉高等学校
	活動名 総合学習研究プロジェクト 経験と経済に着目した 3 年間の学び	

課題の設定：「総合的な学習の時間」の HR 化

岩倉高等学校の総合学習は 4 年前まで、目標やテーマ設定が明確になく、クラス担任が担当していたこともあり、LHR との区別があまりない状態だった。そこで、5 教科 9 名の教員がプロジェクトを組み、総合学習科を立ち上げ、学習指導要領にのっとった 3 年間の学びのデザインをおこない、上記の課題の打開を目指す。

方針・計画：総合学習研究プロジェクトの立ち上げ・総合学習科の確立・3 年間の学びのデザイン

5 教科 9 名の教員で、総合学習研究プロジェクトを立ち上げ、平成 28・29 年度は私学財団の研究協力学校として、教科としての総合学習科を確立。研究報告をおこない、校内外に取り組みを報告。平成 30 年度は引き続き総合学習科として、1～3 年生の総合学習の教科担当を担っている。

活動内容：総合学習研究のための定例会・合宿・報告、週に 1 度の教科会

理論班、1 学年班、2 学年班、3 学年班に分かれ、月に 1 度の定例会と年に 1 度の合宿をおこない、総合学習の研究、実践、報告をおこなった。1 年次は「教育と探求社」が提供する企業インターンシップ「クエストエデュケーション」を取り入れ、様々な経験自体が「生きる力」につながることを伝えた。2 年次は「株式学習ゲーム」をおこない、株についての知識を学んだ。1 年次のインターンと 2 年次の株の学習により、3 年次ではより大きな経験として、「起業体験」を実践した。

活動の成果：研究報告・東京私学教育研究所紀要に掲載・総合学習科として 3 年間の学びのデザイン

今までの研究の多くは、まず育てたい能力を掲げ、それに沿った活動を選択し、成果を見るというものが多かった。しかし本校の総合学習において、育てようとする資質、能力、態度については、あえて掲げていない。なぜなら「経験」において生徒が得る能力は多岐にわたり、生徒が得る能力は決めておく必要はない。そこで育てたい能力を選択し絞るのではなく、より多くの経験をさせること、経験の質を上げることが重要であると考える。そこで上記の活動内容のように、経験と経済に着目した 3 年間の実践をおこなった。結果、1 年次の「クエストエデュケーション」では、全国 150 校約 2 万人の小中高生から 85 チームが選ばれるプレゼンテーションの全国大会に出場した。3 年次の起業体験では、東京証券取引所と浅草エーラウンド実行委員会の協力を得て、現金を投資していただき、校外イベントでの商品の販売をし、決算報告をおこなうというプロセスを踏むことができた。また、これら 3 年間の学びを全教職員に報告することによって総合学習への理解を深めることができた。

アピールポイント（アイディアや工夫）

・「生きる力」を定義するのではなく、「経験」を提供することを目的としていること
・本校では高校卒業後、就職をする生徒も多いため、社会で必要な経済に着目したこと
・教員の有志が集まり、学校全体のプロジェクトになったこと
・課題であった「総合的な学習の時間」の HR 化を打開したこと

＜3 年間のシラバス概要＞

時期	1 年次（インターンシップ）	2 年次（株式学習）	3 年次（起業体験）
4 月	全体ガイダンス オリエンテーション	オリエンテーション **新聞学習** 私の一押しニュース①	オリエンテーション
5 月	インターン募集 履歴書 チーム配属	私の一押しニュース②③④ 壁新聞	調べ学習・発表 チーム配属 事業計画検討・作成
6 月	新人研修 （フィールドワーク）	**株の力** ミッションを受け取る 3 つの視点を学ぶ 広告の構造を知る 広告制作	事業計画検討・作成 投資家へ事業計画のプレゼンテーション 事業計画修正 コンペ
7 月	課題報告	プレゼンテーション 本社プレゼン	会社設立，現金手交
9 月	アンケート調査 （フィールドワーク） 課題報告	**株式学習ゲーム** オリエンテーション Part1-Part2 Part3-part4 マニュアル編 企業調べ 銘柄選定 売買と結果確認①	出店準備
10 月	企画会議	売買と結果確認②③④	販売活動
11 月	中間発表 （ラウンドテーブル） 企画の見直し プレゼンテーション研修	ブルサ 売買と結果確認⑤ スカイプ中継 売買と結果確認⑥	決算書類の作成 会計監査 株主総会 結果発表・全体総括
12 月	プレゼンテーション（クラス発表） エントリー	東証見学 売買と結確認⑦	
1 月	プレゼンテーション（企業別発表） プレゼンテーション（全体発表）	プレゼンテーション	
2 月 以降	振り返り プレゼンテーション	**世間学**	

＜生徒が企業の方とディスカッションしている様子＞

＜総合学習科研究報告の様子＞

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：C - 11	部門 校内研修部門	学校名・氏名 大田原市立大田原小学校・黒田　充
	活動名 プログラミング教育研修 研究コアグループによる職員研修会の充実	

課題の設定：

新学習指導要領から実施される「プログラミング教育」。教師自身が「プログラミング」の経験や学習を受けた経験が少ない。職員の研修を充実させ「プログラミング教育」を 2020 年にスタートできるよう課題を設定した。
①プログラミング教育の理解　②プログラミングをどのように教科の中で活用していくか。
③「プログラミング思考」とは何か。　④プログラミング教育を実施するために必要な学習環境はどうあるべきか。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

知識や技術を持ち合わせていないので、有識者に協力をいただくことが課題解決の糸口だと考え、研修先を精選する。また、プログラミング教育検証のためのコアチームを結成し、校内研修の充実を図った。
・特定非営利活動法人みんなのコード　プログラミング教育指導者養成塾への参加
・茨城県教育工学研究会　D-project 茨城　月例研修会への参加
・視聴覚教育総合全国大会・放送教育研究全国大会　等への参加　※＜主な研修先＞

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

①研修会の精選　②研修会内容の紹介・参加者の募集　③研修会参加
④研修会報告会・ミニ研修会　⑤授業実践（校内公開）　⑥授業のリフレクション
⑦実践の蓄積　⑧カリキュラム作成
検証チームが中心に活動するが、随時参加募集をかけ積極的に「プログラミング教育」に関わってもらう。
資料や研修した内容をその都度全体に周知し、機会をうかがってミニ研修会も実施する。

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

①プログラミング学習には、「アンプラグド学習」「ビジュアルプログラミング学習」「フィジカルコンピューティング」などの手法があり、イメージしていたよりハードルが下がった。
②教科単元ごとに、プログラミングの種類の相性を知り、新学習指導要領で示している算数や理科以外にも有効に活用する場面を見つけることができた。
③『自分の意図した指示を対象に与えるために、順序や手段を考える力』『自分の作りだしたもの（成果物）に対して、根拠をもって説明できる力』と大まかに捉え、教科のめあてを達成するための手法として扱うことで、様々な場面で活用できた。
④ペア学習やグループ学習で使用するには、本校はハード面で整っているが、使う側のソフト面で不十分なことが分かった。情報スキルや情報リテラシーの見直しを行い、6 年間のリテラシー達成表を完成させた。

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

・研究・検証グループを設置
・研修会参加後、研修報告会・ミニ研修会
・検証授業の授業公開
・コンピュータサイエンス週間の設置（全児童・全教員のプログラミング学習、プログラミング体験ウィーク）

＜写真、図表添付欄＞

コンピュータサイエンス週間実施

（みんなのコード　代表利根川　氏を迎えて）

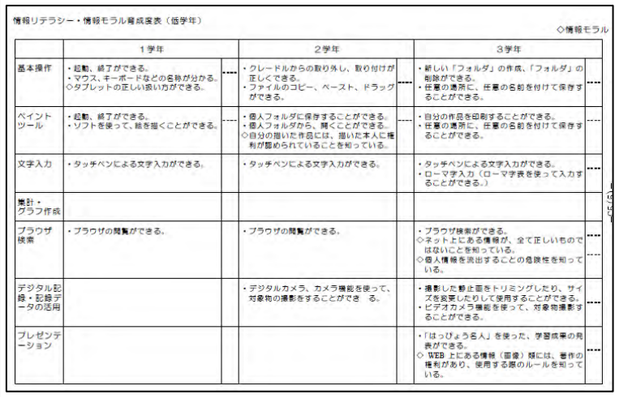
研修会への参加

内田洋行・みんなのコード

「翔泳社」さんを迎えての、プログラミング研修会

検証グループによる、現職教育

情報リテラシー系統表

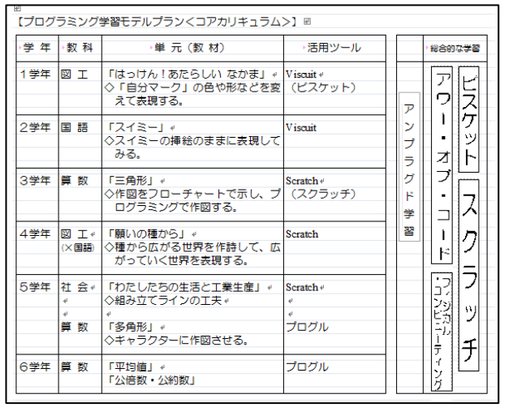


情報リテラシー・情報モラル育成度表（低学年）

◇情報モラル

	1学年	2学年	3学年
基本操作	・起動、終了ができる。 ・マウス、キーボードなどの名称が分かる。 ◇タブレットの正しい扱い方ができる。	・クレードルからの取り外し、取り付けが正しくできる。 ・ファイルのコピー、ペースト、ドラッグができる。	・新しい「フォルダ」の作成、「フォルダ」の削除ができる。 ・任意の場所に、任意の名前を付けて保存することができる。
ペイントツール	・起動、終了ができる。 ・ソフトを使って、絵を描くことができる。	・個人フォルダに保存することができる。 ・個人フォルダから、開くことができる。 ◇自分の描いた作品には、描いた本人に権利が認められていることを知っている。	・自分の作品を印刷することができる。 ・任意の場所に、任意の名前を付けて保存することができる。
文字入力	・タッチペンによる文字入力ができる。	・タッチペンによる文字入力ができる。	・タッチペンによる文字入力ができる。 ・ローマ字入力（ローマ字表を使って入力することができる。）
集計・グラフ作成			
ブラウザ検索	・ブラウザの閲覧ができる。	・ブラウザの閲覧ができる。	・ブラウザ検索ができる。 ◇ネット上にある情報が、全て正しいものではないことを知っている。 ◇個人情報を流出することの危険性を知っている。
デジタル記録・記録データの活用		・デジタルカメラ、カメラ機能を使って、対象物の撮影をすることができ る。	・撮影した静止画をトリミングしたり、サイズを変更したりして使用することができる。 ・ビデオカメラ機能を使って、対象物撮影することができる。
プレゼンテーション			・「はっぴょう名人」を使った、学習成果の発表ができる。 ◇ WEB 上にある情報（画像）類には、著作の権利があり、使用する際のルールを知っている。

プログラミング教育コアカリキュラム



【プログラミング学習モデルプラン＜コアカリキュラム＞】

学 年	教 科	単 元（教 材）	活用ツール		総合的な学習
1学年	図 工	「はっけん！あたらしい なかま」 ◇「自分マーク」の色や形などを変えて表現する。	Viscuit （ビスケット）	アンプラグド学習	ビスケット
2学年	国 語	「スイミー」 ◇スイミーの挿絵のままに表現してみる。	Viscuit	アンプラグド学習	アワー・オブ・コード
3学年	算 数	「三角形」 ◇作図をフローチャートで示し、プログラミングで作図する。	Scratch （スクラッチ）	アンプラグド学習	スクラッチ
4学年	図 工 (×国語)	「願いの種から」 ◇種から広がる世界を作詩して、広がっていく世界を表現する。	Scratch	アンプラグド学習	スクラッチ
5学年	社 会 算 数	「わたしたちの生活と工業生産」 ◇組み立てラインの工夫 「多角形」 ◇キャラクターに作図させる。	Scratch プログル	アンプラグド学習	スクラッチ
6学年	算 数	「平均値」 「公倍数・公約数」	プログル	アンプラグド学習	スクラッチ

〇研修実践の結果

学びの場.com（https://www.manabinoba.com/class_reports/016069.html）

プロカリ　（https://procurri.jp/2018/07/03/artecrobo/）　等に掲載

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

<エントリーシート>

※ 事 務 局 記 入 欄

No.：C - 12

部門
校内研修部門

学校名・氏名
京都市立葵小学校

活動名
働き方改革は生き方改革
業務効率を高め教育の質を上げ隊！

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

大量退職・大量採用時代を迎え，学校組織の若年化や新学習指導要領への対応が急がれる中，本校でも，組織力の向上とそれに伴う人材育成という極めて大きな課題に直面している。そこで，今年度は京都教育大学連合教職実践研究科，京都市総合教育センターと共同研究し，従来の研修や学年会を**学校教育目標を具現化する自律的・協働的なチームとなり得る研修や学年会**に変革をする。その上で，**カリキュラムマネジメントと働き方改革を連動させた校内組織**により，アクティブ・ラーナーとしての教職員を育成することでこの課題に対応したいと考えている。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

上述の課題を解決するために，以下 3 点の取組を計画することで，全員が当事者となり得るカリキュラムマネジメントと働き方改革を連動させた学校組織づくりが実現できると考えた。
①教職員による学校教育目標と子どもに付けたい資質能力の設定。
②学校教育目標を具現化するための学年会組織。
③自律的・協働的な教職員集団になるための校内研修改革。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

①学校教育目標と児童に付けたい資質・能力を教職員が設定し，ビジョンの共有を図る。（写真 1）
②学年会において，関連単元配列表・年案・月案・週案・日案を活用することでカリキュラムマネジメントを推進するとともに，学年会のあり方及びやり方を設定し，当該学年の児童の良さや課題を解決するチームとしての機能を発揮する。（図 1，写真 2）
③外部講師を招聘し，働き方改革に特化した校内研修を 3 回実施する中で立ち上げたプロジェクト（『業務効率を高め教育の質を上げ隊！』）ごとに取り組みを進める。（写真 3，図 2）

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

①ライフとワークを深く見つめる研修を実施したことで，スクラップ＆ビルドを行うための判断の軸が明確になった。
②学年会と校内研修を連動させたことで，個人の実践を対話的に振り返り概念化し，ありたい姿を学年や組織で描き続ける対話型マネジメントが実現し，学年会を学校教育目標を具現化するチームにすることができた。（図 3）
③児童に付けたい資質・能力『人間関係力』を高めるため，『業務効率を高め教育の質を上げ隊！』を立ち上げ，自律的・協働的なチームとして取り組むことで，児童の関係性の質と自己肯定感が向上した。（図 4）

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

・外部講師を活用した生き方の質を変えていくための働き方改革…個々の教職員が生き方の質を豊かにし，幸せな人生を生きるための働き方改革。
・『業務効率を高め教育の質を上げ隊！』…ビジョン（学校教育目標）起点のプロジェクト。
・対話型マネジメント（実践→振り返り→概念化）…アクティブラーナーとしての教職員の育成。

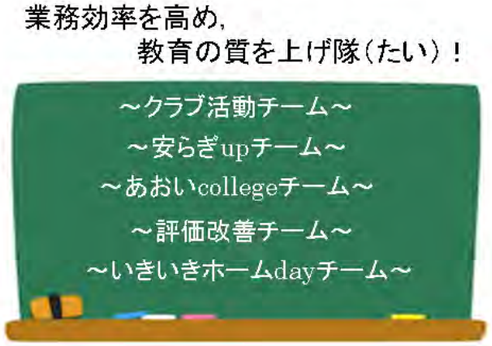
<写真、図表添付欄>

（写真 1）

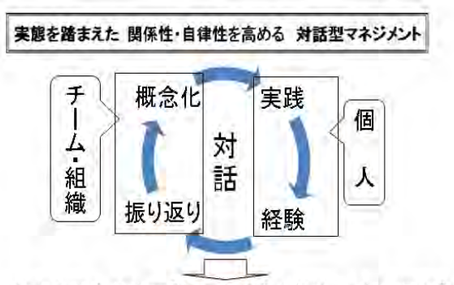
（写真 2，図 1）

（写真 3）

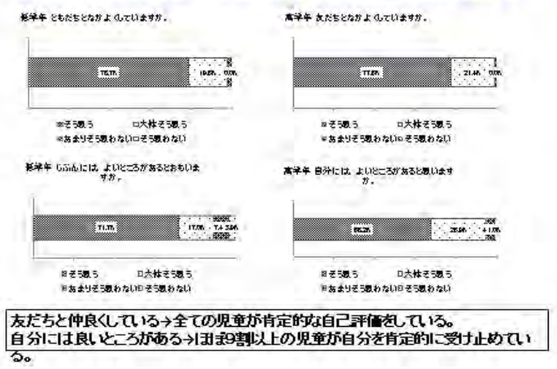
（図 2）



（図 3）



（図 4）



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

<エントリーシート>	部門 校内研修部門	学校名・氏名 愛媛県西予市立中川小学校
※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C - 13**	活動名 児童の学力向上を目指して ～全教職員で取り組む校内研修より～	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

1　確かな学力の定着
2　校内研究組織を生かした課題の共通理解と改善に向けての手立ての明確化
3　学力向上推進計画による具体的な取組の充実

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

1　学年に応じた家庭学習時間の確保、自主学習の奨励により、確かな学力が定着するであろう。
2　「チーム中川」としての組織的な研究実践の積み重ねが、児童の学力向上につながるであろう。
3　教職員の共通理解のもと PDCA サイクルを活性化させることにより、学力向上を図ることができるであろう。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

1　家庭との連携による習慣化（基本的生活習慣の定着、「学習のてびき」の作成と家庭学習及び読書時間の確保、親子読書の奨励、学力向上だより等による啓発）
2　校内研修計画にもとづく授業研究及び授業部会、学力向上部会からの提案と実践（校内研修による授業改善、漢字テストや期首・期末テストの個人データの蓄積と分析、日記指導週間の取組、俳句づくりの取組と各種俳句大会応募による意欲化）
3　学力向上推進計画による取組（かがやきタイムにおける読解力を伸ばすための手立て、図書委員会との連携による読書の奨励、自分の考えを伝え合場の確保）

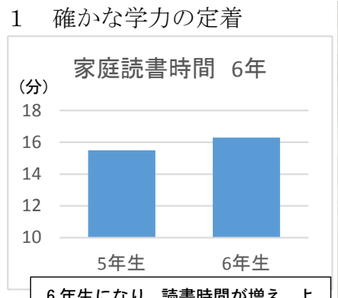
活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

1　児童の学習意欲、読書意欲の向上
⑴　毎月のパワーアップ週間において、基本的な生活チェックとともに学習時間・読書時間等の記録を生かして指導やコメントすることにより、児童・保護者の意識の高揚と児童の学習意欲の向上につながった。
⑵　長期休業中における親子読書の取組により、読書の楽しさを親子で共有することで、読書意欲の向上につながった。以後、毎月 1 冊以上の親子読書を継続しており、さらなる意欲の向上を目指している。
2　教職員の研修に対する意識の変化
⑴「チーム中川」として、授業改善に組織的に取り組むことで、「分かる授業」「主体的に学ぶ授業」の構築をすることができ、指導力の向上につながった。
⑵　月 1 回の「俳句の日」の取組と各種俳句大会に応募することにより、児童の意欲化と表現力育成のための指導力の向上につながった。
3　学力の向上
⑴　継続した朝ドリルの取組により、漢字テストや期首テスト等において、習得率 80%を維持している。
⑵　集会における低中高学年別の目標設定による感想発表の場を確保することで、多くの児童が意欲的に自分の考えを伝えようとするようになった。

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

1　読書についての啓発（家庭との連携による親子読書の奨励）
2　「主体的・対話的で深い学びに向かう授業」モデルの活用、ペア・グループ学習の進め方とユニバーサルデザイン（UD）を意識した授業展開、「読み取り名人」の活用による主体的な取組、ICT を活用した授業
3　児童の漢字テストや期首テスト等のデータ蓄積と分析（長期及び短期）

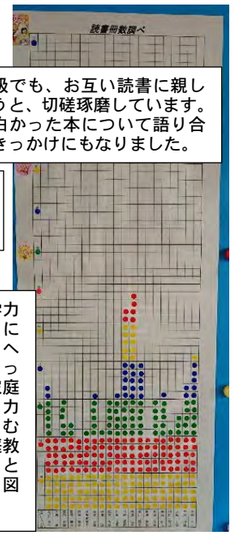
1　確かな学力の定着



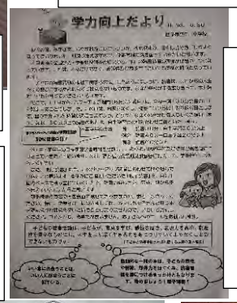
6 年生になり、読書時間が増え、よりよい家庭読書習慣の定着が見られます。

このコーナーでは、よりよい家庭学習について紹介し、意識の向上を図っています。

図書室前には、親子読書の図書が紹介されています。人気の図書は、次々貸し出されています。



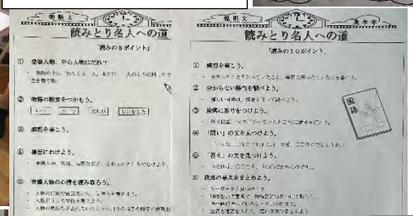
学級でも、お互い読書に親しもうと、切磋琢磨しています。面白かった本について語り合うきっかけにもなりました。



定期的な「学力向上だより」による保護者への啓発を行っています。家庭と学校が協力して取り組むことで、家庭教育力の向上と学力向上を図っています。

2　校内研究組織における取組

研究授業では、ユニバーサルデザインを意識した取組を「チーム中川」として共有しています。児童の実態に応じた対応について、ＰＤＣＡサイクルの活性化を図っています。

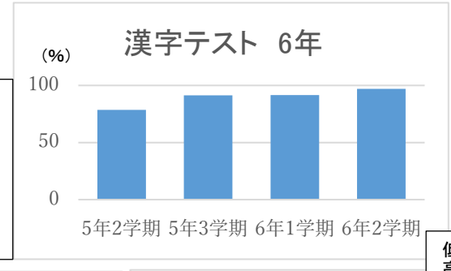


説明文や物語文の読解力向上を目指して作成した「読み取り名人への道（低中高用）」を各学年の実態に応じて、取り組んでいます。

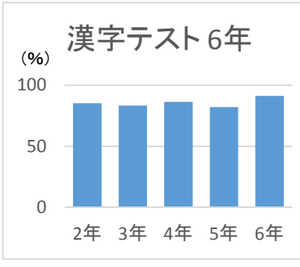
全校みんなの俳句を掲示しています。各学年の代表作品は、１階の俳句大好きコーナーで紹介しています。特選句には、教師が児童の句への講評を書き込みます。

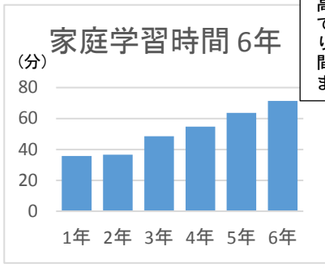
日記指導週間には、学級担任以外の先生に日記を見てもらいます。児童は、校長先生をはじめ、いろんな先生からのコメントなど、とても楽しみにしています。

3　学力向上推進



漢字の習得率 80%以上を目標に、地道に取り組んでいます。低学年のときから、日々の積み重ねを大切にして、長期的に取り組むことで、基礎学力の底上げを図っています。





低学年３０分、中学年４５分、高学年６０分の目標を設定して、家庭学習時間の確保に取り組んでいます。年々学習時間が増えてきたことがわかります。

発表集会では、全校みんなの前で自分の考えを発表します。高学年になるほど、内容に深まりが見られ、意見交換ができはじめています。

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1 】

<エントリーシート> ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：C - 14	部門 校内研修部門	学校名・氏名 岐阜大学教育学部附属小学校
	活動名 主体的に参加する授業研究 ～子どもの事実はマネジメントの宝～	

課題の設定：

若手教諭の増加、本校勤務年数の短い教員増加ということから，議論が深まらない、授業成果が確認できない授業協議会が続いていた。そこで、授業提案にとどまらず、授業協議会を改善するとともに、他校との協働を促すことで、参加した教師が授業力の向上を自覚できる実践研究となると考え実施している。

方針・計画：

研究意図を提示し，参加者に共通理解を促すことによって，授業者の計画に沿った意見を述べることができたり，議論を深めたりすることができる。授業場面では、参会者は抽出した児童を見取り、その様子を交流し合う協議の場を設定した。児童の姿から学ぶ時間を取ることで、主観的な意見の言い合いになることのない議論が展開できる。協議会後には、全体の意見を推進委員会によって、振り返りとまとめていく。

活動内容：

- 研究推進委員会にて，「全校研究会の考え方」（資料１）を作成。提案授業と自分の実践を関連付け意見をもって参観分析が可能とした。提案授業の前時は，自由参観の時間として設定。
- 「全校研究会の進め方」と指導案を関連付け，研究授業を観る視点や記録の取り方を確かめることで，授業分析力を高める。同時に、抽出児を追うことで子どもの思考の流れを学び合った。
- 研究協議に向けファシリテートの仕方，ホワイトボードのまとめ方など，教師の能力向上ももとめる。
- 市内の公立学校と協働の授業研究会とし、他校の授業力向上の場とした。他校の教師の多様な視点を得て，それを改善に活かすことで，よりよい研究会になることを目指した。

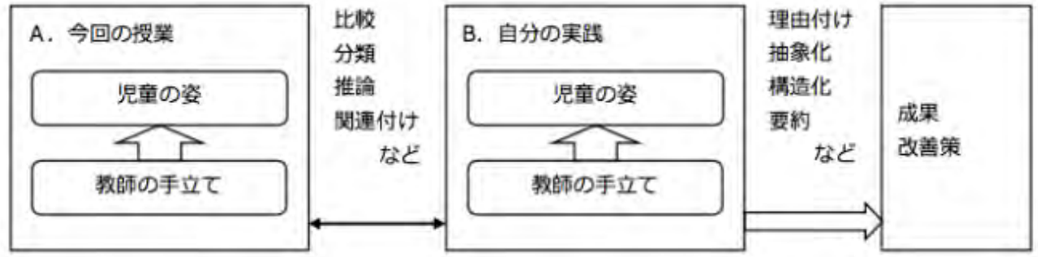
活動の成果：

参加者は，教職経験年数に関わらず，授業の児童の姿を根拠に，手立ての良し悪しや改善策等を述べることができるようになった。子ども一人一人を見取ることの重要さを、職員一人一人が感じることができた。グループのファシリテーターは研究会の論点から外れることなく、議論を進めることができ，発表者もグループの意見を要点を絞った発表ができた。
（参加者より）
- 授業者の指示・意図と子どもの姿をじっくり見つめられて，改めて児童理解の大切さを実感した。
- 自分の実践と比較しながら話したり，「○○（教科）でいうと，△△ってこと」と教員らしく自分が実施するときにはとか、自分の教科に置き換えて話しをしたりすることができるようになった。
- 「全校研究会の考え方」が事前に示され，授業者の計画意図を意識した参観ができるようになった。
- 参加者が共感的に聴いてもらえる雰囲気があり，若くても話しやすく意見が言いやすい。
- 児童の様子とそれに関わる働きかけが、付箋で俯瞰でき、授業から研究の視点が明確になる。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

・附属の校内授業研究会を公開し、地域の学校の協働の授業の場とする。
・協議方法や資料、授業資料等は、他校の授業研究会でも活かせるように公開している。
・経験年数の若い教師と、中堅の教員が、授業中の児童の思考の見取り方を小グループで交流できる。
・授業改善の方法が，ＰＤＣＡサイクルに乗せやすく、授業者も次時から修正を試みることができる。
・誰もが参加しやすい開かれた研究協議の場であり、公平に意見を取り扱える。

資料１「全校研究会の考え方」(一部)に記された授業研究と日々の自分の授業との関連



資料２

抽出児童の実態からみられた様子を付箋に記してホワイトボードミーティング。

ファシリテーターを中心とした授業分析の観点と実態からみられる分析の話し合い

資料３「全校研究会の考え方」(一部)に記されている授業改善への方向性。

☆ 全校研究会では，子どもの学びの事実を根拠に，その背景を探る推論を重ねていくことが重要となります。事実と推論，改善策を関連させながら，考え（意見）を組み立てていきましょう。

子どもの事実	→ 事実の見取り	→ 推論	→ 改善策
（見たまま）	（～はできていた） （～はできていなかった）	（～という手立てからできた。） （～が原因でできなかった。）	

☆ 全校研究会で発言をするためには，自分の実践の幅（意図を明確にした手立て，児童の実態把握）を広げておくことが大切です。（普段の授業でどれだけ意識して行えるかが問われます。）
☆ 全校研究会を単なる授業研にしてはいけません。授業研とは，授業における児童の姿や教師の手立てのみで議論を進める様子です。全校研では，自分の実践における児童の姿・教師の手立てと照らし合わせて，共通点・相違点などを見出して意見を作っていきましょう。
☆ また，空中戦になってもいけません。空中戦とは，児童の姿から離れ，定義や言葉の解釈，理論だけで議論を進める様子です。あくまで，「目の前にいる児童の姿」をベースに議論を進めなければなりません。
☆ 教師（指導観）と教材（題材観）と児童（児童観）をよく理解してから臨みましょう。新しい試み（教材・題材）を行っているのに，従来の題材観を持ち出して話し合うのはナンセンスです。相手の土俵に上がって（教材・題材を理解した上で），建設的な話し合いにしていきます。
☆ 「発達の段階（発達段階）に合わせて手立てを変えていく必要がある」と一口で言ってしまいますが，この具体をきちんと示したいものです。（つまり，発達の段階を事前に学んでおく。例えば，メタ認知能力は一般的に中学年以上から発達していく　など。）
→ 「○年生では，～な姿（～である）という発達の段階（発達段階）を踏まえ，～な手立てを仕組むとよいのではないか。」

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

<エントリーシート> ※事務局記入欄 **No.：C - 15**	部門 校内研修部門	学校名・氏名 愛知県豊川市立国府小学校
	活動名 ペア研究制度で教師力向上 － メンター制度の課題を乗り越えて －	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

中教審答申（平成 27 年 12 月 21 日）の「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」という資料で、全教職員がそれぞれのキャリアステージで、自己を成長させていくことが示された。それに基づいて、どのように校内研修を組み立てていくべきか、職員にアンケートを取った。職員全体で優先的に取り組むべき研修と個別のニーズに対応する研修の２つに分けられた。そこで昨年度、個別のニーズに対応する研修として若手教員向けにメンター制度を取り入れた。１年間実施した結果、２つの課題が出された。

① 若手だけでなく、ミドルリーダー世代やベテラン世代からも参加したいという声があがった。
② 活動の時間が確保できず、活発に取り組めたペアとそうでないペアができてしまった。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

メンター制度導入２年目に当たり、上記の課題を解決するために、以下の方針を立て、活動を計画した。
方針：さらに多様なニーズに対応し、自分の学びたいことを十分に学べるような仕組みを作る。
① 多岐に渡る個別のニーズに対応するために、メンター制度を「ペア研究制度」に改めた（資料１、２）。
② 研修の時間を確保するために、月に１度「ペア研究タイム」を設け、年間行事予定の中に位置づけた。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

○以下は、行われた活動の例である。
・授業づくりの段階からペアで一緒に教材研究を行い、教育論文にまとめるところまで共に研究を行った。
・週に１度、授業を参観して協議会をもった。 ・ベテランがペアの学級に飛び込みで師範授業を行った。
○ペア研究タイムの前には、研修主任が話題提供をし、活動を一言感想にまとめてもらった（資料３）。

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

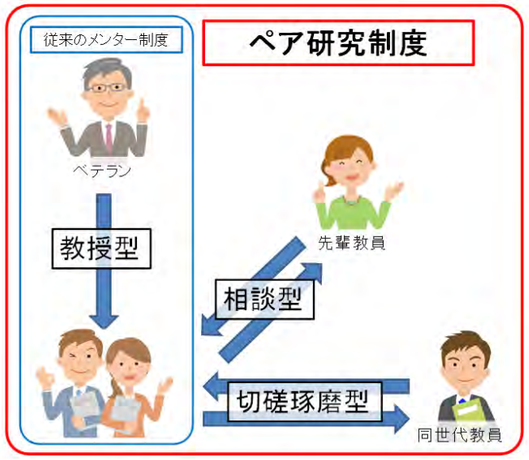
① 参加者のアンケート（5 段階評価） 平成 29 年度 平成 30 年度
本制度は、教師力の向上に役に立つと考えますか。 （平均 4.46） （平均 4.56）
② ペア研究制度に改めることにより、参加者が１１人（１年目）から１８人（２年目）に増え、前年度比１６４%となった。また、参加者の年代構成は（資料４）の通りである。参加者の増加や様々な年代の方が参加できるようになることで、研修全体が活性化した（資料５）。
③ 参加者の声
・継続して一人の先生の授業を見ることで、その先生がどんなことを考え、どんな手立てを打ってきたか、そして子どもがどう変わってきたかを改めて実感することができました。私も大変勉強させてもらいました。（校長）
・ペア研究制度があることで、気軽に質問したり、相談したりすることができました。（20 代）
・Q-U についてペアの先生（20 代）から研修講師に聞けなかったことを教えてもらいました。Q-U を上手に活用してよりよい学級集団にしていければと思います。（30 代）

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

①ペア研究の形をとることで、従来の教授型の活動から相談型や切磋琢磨型などの多様な活動が生まれた。
②ペア研究タイムを 15 分と設定し、年間計画に位置付けることで無理なく、安定的に研修を行うことができた。
③ペア研究制度で教員人生のメンターと出会い、異動した後も継続的に活動するペアが生まれた。

＜写真、図表添付欄＞

資料１：ペア研究制度の概要



資料２：ペア研究制度の説明会資料

資料３：報告用紙と提供した話題例

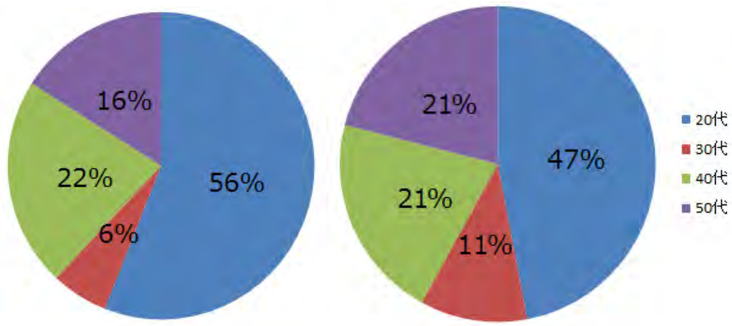
平成 30 年 7 月 13 日（金）16:30～16:45
第２回目のペア研究タイムとなります。
夏休みまであと１週間です。子どもたちは、ついつい気持ちが高ぶってしまう時期です。１学期の最後に何を語って、休みに突入するか。そんな話題もいかがでしょうか？
２学期には、公開授業をされる方も多いかと思います。授業ネタを交換したり、授業を見合ったりというのもいいかもしれません。
また、行事も立て続けに行われます。そういった情報交換もいいですよね。
一言感想が書けましたらば、川合ロッカーの封筒へお願いします。
＝＝＝＝＝ キリトリセン ＝＝＝＝＝
氏名（ ）
今月の活動・学び・一言感想

話題提供

報告用紙

＜提示した話題例＞
・行事指導
・学級経営の勘所
・仕事術
・学習規律の定着法
・子どもへの接し方
・子どもの心に入る語り
・授業の組み立て方
・特別支援教育

資料４：参加者の年代構成（左：H29 年度 右：H30 年度）



資料５：ペア研究の様子

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

＜エントリーシート＞	部門 校内研修　部門	学校名・氏名 千葉県立長生特別支援学校
※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C - 16**	活動名 特別支援学校学校安全研修 多職種校における安全研修の在り方	

課題の設定：

学校健康教育の三領域(学校安全、学校保健、学校給食)に特別支援学校では以下の視点が加わる。
・学校安全：スクールバスや多岐に渡る自力通学の計画　消防法による防火管理基準が異なる
・学校保健：医療的なケアへの対応　災害時における緊急薬の預り
・学校給食：再調理の形態が個に応じている　摂食指導（誤嚥の防止）
また、教諭、事務職員、養護教諭等の教職員の数の多さに加え、看護師、スクールバス運転手、バス介助員、調理員等、職種も多岐に渡る。
学校安全に係る職員の研修内容を学校安全計画に明記し、学校の全職員に徹底されることを目標にする。

方針・計画：

教職員の数が多く、また、他職種であり、学校安全に係る内容も多岐に渡る特別支援学校において、安全で安心な学校を作るためには、安全に係る研修内容を学校安全計画に明記し、全職員で研修に取り組む中で、随時見直しや追記をしながら研修内容を共有していくことで、安全に対する意識を醸成、維持し、児童生徒が楽しく学校生活を送れるであろうという仮説を立て取り組んだ。

活動内容：

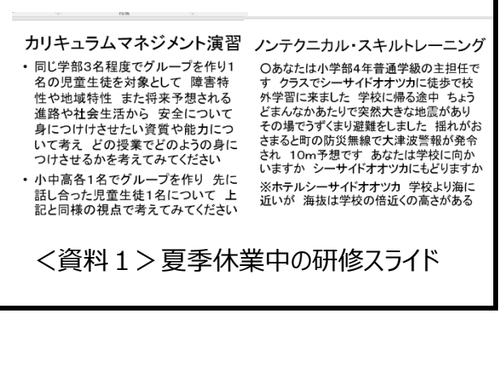
・学校安全：学校安全計画の確認＜資料２、３＞　不審者対応＜写真１＞　スクールバス内での発作や津波発生時の初期対応＜写真２＞　消火訓練　通学路やスクールバス停の安全確認　起震車（保護者、地域向けを含む研修）　学校安全（夏季休業中　他校や他県の防災教育の実践も紹介）
・学校保健：心肺蘇生・AED 使用　水泳の授業中等における発作時等の対応　医療的ケアが必要な児童生徒の緊急時対応　嘔吐時の対応や緊急薬の預り等の確認　アレルギー・エピペン使用
・学校給食：調理器具の劣化等に関する確認　過去の異物混入死亡事故から学ぶ　再調理　摂食指導

活動の成果：

夏季休業中の研修アンケート等より（職員）○他県での取り組みを知ることができ見聞が広がった。今後授業でも防災・安全の視点を意識しながら、どの教科等につながっていくのかも考えて授業を構成したい。○いつ起こるのか分からない災害を、いろいろな場面で想定して（校外学習や修学旅行）考えておくことが大切だと思った。避難等について、他の先生方の考え方も伺うことができて勉強になった。○命を預かっていることを一番に考え、臨機応変な対応ができるように常に意識をもっていたいと思った。○「我がこと意識」が高まった。毎日の生活の中から防災や安全に結び付けて指導・実践をしていきたい。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

・今まで行っていた防災・安全に関する研修を学校安全計画に視覚的に網羅することで、学校安全への理解が深まった。
・今までの訓練や研修等について、学校全体の視点でつなぎ、話し合いながら考える研修を夏季休業中に行ったことで、学校安全への意識が高まるとともに、日常生活における安全についても考えるようになった。＜資料１＞
・管理職（事務長や教頭）や安全に係る分掌チーフの連携により、他職種職員も含めて組織的な研修が実施された。



＜資料１＞夏季休業中の研修スライド

＜写真１＞訓練の前に職員の不審者対応研修　＜写真２＞他職種によるスクールバスの緊急時対応研修

平成３０年度学校安全計画　１１．１現在

項目＼月			4	5	6	7・8	9	10	11
月の重点			通学路の安全を確認しよう	運動会を安全に成功させよう	プールでの事故に気を付けよう	夏休みを安全に過ごそう	交通安全について確認しよう	しおかぜ祭を安全に成功させよう	交通安全について確認しよう
安全教育	安全学習	教科 保健体育	・体育施設、設備の使用方法　・性に関する指導から命の大切さや安全な生活につなげる	・運動会練習や準備や片付け、移動時の安全	・プールにおける健康と安全（日常生活の指導における健康チェック等） ・熱中症対策			・しおかぜ祭練習や当日の安全	・駅伝練習に 安全
		理科	・実験器具の安全な使い方及び薬品の安全な使い方と点検（実験の際、プリントによって安全指導の徹底を図る）						
		美術	・道具の安全な使い方　・防災安全に関するポスターや掲示物等の作成						
		職業・家庭	・調理で使用するガスコンロなどの安全な使い方　・ミキサー、電子レンジ、ホットプレートなどの電気製品の安全な使い方　・包丁、ピーラー ・ミシン、アイロンなどの電気製品の安全な使い方　・針やはさみなどの道具の安全な使い方						
		作業学習	・中学部（・花づくり班・手工芸班）　・高等部（・園芸班・焼き物班・レザークラフト班）　・道具・工具の安全な使い方・塗料の使い方と喚						
		道徳	・A 主として自分自身に関すること（節度，節制）　・C 主として集団や社会との関わりに関すること（規則の尊重）　・D 主として生命や自 学習する。						
		自立活動	・健康の保持（アレルギー対応、緊急薬の保管、再調理の道具等の管理面の充実及び、変化への対応力の育成）、心理的な安定（安心グッズの の把握、身体の動き（車椅子ごと運べない場合、避難時に抱えられる、おぶられる姿勢や過敏の解消）、コミュニケーション（助けてといえる						
	全教	生活科・日常生活の指導	・避難訓練の事前、事後学習において、指導に加えて主体的・対話的で深い学びになることを意識する。生活科の安全教育に係る内容について、 「健康管理」「危険防止」「交通安全」「避難訓練」）。**小学部より全校へ「ラップ♪防災」を広める（カリキュラム・マネジメントの**						
		総合的な学習	・学校における全教育活動との関連を元に計画し、自然体験（火山や風水害を含む自然災害）や活動を促す中で、生徒の自発的な計画に基づき **月）体系化を図る。高等部においては、修学旅行先の防災安全についての学習を行う。**						
		生活安全	情緒の安定　日常生活における安全（「助けて」の発信）	集団行動の約束 友達との接し方	一人では行っては行けない場所、人通りの少ない場所確認	夏休みの過ごし方	自分の身を守る登下校や交通機関の安全な利用方法	不審者から自分を守る（防犯避難訓練）	集団行動の約束 友達との接し方
		交通安全	登下校の安全 安全な歩行	交通安全指導	雨の日の交通安全(傘のさし方)	交通機関の利用方法	横断歩道のわたり方 自転車の乗り方	交通安全指導	交通機関の利用 ナー
			・自力通学指導（スクールバス優先乗車を含む）　・自転車安全指導　・**プロック塀の危険について**						

＜資料２＞随時見直しや追記をし PDCA サイクル実施を踏まえた学校安全計画

項目＼月		4	5	6	7・8	9	10	11
月の重点		通学路の安全を確認しよう	運動会を安全に成功させよう	プールでの事故に気を付けよう	夏休みを安全に過ごそう	交通安全について確認しよう	しおかぜ祭を安全に成功させよう	交通安全について確認しよう
安全管理	対人管理	・生徒の状況把握 ・通学経路の確認 ・避難経路確認 ・火元責任者の表示	・緊急体制の確認 ・健康観察 ・避難経路確認	・水泳健康管理 ・健康観察 ・心肺蘇生法確認 ・ＡＥＤの研修	・水泳健康管理 ・健康観察 ・夏季休業中の安全	・水泳指導健康管理 ・健康観察	・健康観察	・健康観察
	対物管理	・防災計画届け出 ・通学路確認 ・安全対策マニュアル	・教科水点検・避難経路確認・防災設備の点検（毎月のエレベーター点検）	・プール施設・設備点検 ・水質検査 **・岡山県立倉敷まきび支援学校の視察（８月）及び報告（義援金集め）**			・防災設備の点検 ・天然ガス対策のロスナイ換気や感知器の点検	・暖房器具の設備点検
	医療的ケア	・一次避難における教室環境の整備・非構造部材の確認　・校外への二次避難における吸引器やアンビュー、発電機の搬出の具体的方法　・災害時にお 難時のグッズ（ラコール、エピペン等）　・（本年度在籍者はいない）家庭でのみ実施している医療的ケアの指示書						
学校安全に関する組織活動・連携（研修含む）		開かれた学校づくり委員会（年３回）、ＰＴＡ（８月の納涼会）・地域との連携（避難先となるーの宮カントリークラブ、桐田集会場、一宮商業高校、睦沢町						
		・春の交通安全運動、通学指導　・防災安全委員会　・校内外及びスクールバス運行経路の危険箇所点検 **・教職員研修（学校安全計画確認、津波避難ルート確認、車椅子持ち方確認、発作時等の緊急事対応、摂食及び再調理）**	・校外における児童の安全行動把握、情報交換 ・地域生活指導連絡交換会　・ＰＴＡ環境整備、安全確認 **・教職員研修（医療的ケア児の緊急時対応研修）**	・学校安全（保健）委員会 **・教職員研修（心肺蘇生法・ＡＥＤ講習会、授業中に実施するプールでの緊急事対応、調理員等対象の食の安全に係る研修（ヒヤリハットの共通理解））**	・地域パトロール　・防災安全委員会 **・教職員研修（スクールバス緊急事対応研修、大阪北部地震を受けた安全点検に係る研修、高台避難場所確認研修、学校安全研修（地域や他校へも案内））**	・秋の交通安全運動の呼びかけ街頭指導　・授業中の不審者対応訓練　・津波からの避難場所（桐田区）との合同避難訓練 **・教職員研修（さすまたの使い方及び不審者への対応　天然ガスの換気等確認（天然ガス対策が必要な立地のため））**	・地域生活指導情報交換会　・ＰＴＡ環境整備、安全確認 **・教職員研修（前回の反省を踏まえた発作時等の緊急対応研修）・地域・保護者研修（起震車体験の案内）**	**・教職員研修（消火班の消火訓練　地域の防災訓練への参加（代表職員））**
学校保健安全法　第27条：学校安全計画の策定等　第28条：学校環境の安全の確保　第29条：危機等発生時対処要領の作成等＝危機管理マニュ								

＜資料３＞組織活動・連携の欄に、教職員研修の視点を明記し、視覚的に共有・意識できるようにする。

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

<エントリーシート> ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C - 17**	部門 校内研修部門	学校名・氏名 宇都宮大学教育学部附属中学校
	活動名 主体性を生かす授業研究 ―経験や立場をこえた同僚性の醸成―	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

本校では，昨今の予測できない社会の変化にも主体的に向き合って関わり合い，その過程を通して自らの可能性を発揮できる，よりよい「未来の創り手」となるための生徒像を定め，教科ごとに「育てたい資質・能力」を設定して授業改善をしていくことを目標とした。その上で教員一人一人が主体的に研究に向き合い，経験や立場をこえて主体性を生かして取り組めるよう，授業実践から成果を見出す研究を行いたいと考えた。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

出発点となる「未来の創り手」となるための生徒像は教科や教員によって異なる。まずは共通認識ができるよう，過去の研究を皆で確認しながら，「未来の創り手」となるための生徒像を話し合うことからスタートすることにした。その後，共有したイメージをもとに，各教科で授業実践しながら，得られた成果をまとめるような手法をとった。そして，経験や立場に違いはあるが，様々な知見をもった教員が多角的な視点で主体性を生かした授業研究ができるよう，全員が積極的に意見交換しやすい雰囲気作りを中心に計画を組んだ。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

まず，職員全体で「未来の創り手」となる生徒像を話し合った。それをもとに，「各教科で育てたい資質・能力」を設定し，授業内容を検討（写真１）して授業実践を行った。校内授業研究会では，職員が各々担当に分かれて（写真２・図１）生徒たちの活動を見取り，授業を通してどのような資質・能力が身についているのか確認した。これを踏まえて教科ごとでも研究を進め，全ての教科で必要とされる「未来の創り手となるための資質・能力」を教員全員で協議しまとめた（図２）。これらの成果を生かした公開研究発表会を行った。

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

教科をこえて全教員が話し合いを行ったことで，様々な教科で汎用的な資質・能力が育成されていることが整理できた（図２）。さらに，研究授業や話し合いを重ねる中で，他教科との共通項を見つけたり，資質・能力との関連性を考えたりすることで，学校全体で多角的な視点から授業研究をすることができた。公開研究発表会参加者からは「学校を挙げて，在校生達の姿から必要な目標，そこに至る研究課題を設定された汎用性のある内容で，生徒の資質・能力向上にかける思いに感銘を受けた。」との声があった。教職員からも「皆がチームで主体的に授業改善に関わっており，附属中の一人一人の先生方から学ぶことが多かった。」など，実践から学ぶ手法をとったことにより，経験や立場をこえて率直な考えをもとに活発な意見交換ができた。さらに，全教員が同じように主体性をもって研究に取り組むことで同僚性も醸成され，他の校内業務も一体感をもって取り組むことができるようになった。

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

○経験や立場をこえてフラットな考え方で授業実践を行い，授業実践の中から得られたことをできるだけ客観的に検証し，成果をまとめている。（＝ボトムアップ方式の研究）
○職員全員が役割につき，主体性を生かした授業研究をおこなっていく体制づくりをとっている。
○設定した生徒像や資質・能力を踏まえて，教科や教科の枠を越えて授業研究を行っている。
○全職員が授業改善に主体性を生かして取り組むことで同僚性を醸成し，協力して授業研究を行っている。
○校内業務でも教員の主体性を生かし，一体感をもって取り組むことができている。

写真１　他教科の授業を皆で検討しあう姿

写真２　研究授業で生徒を見とる姿

図１　全校体制での研究組織

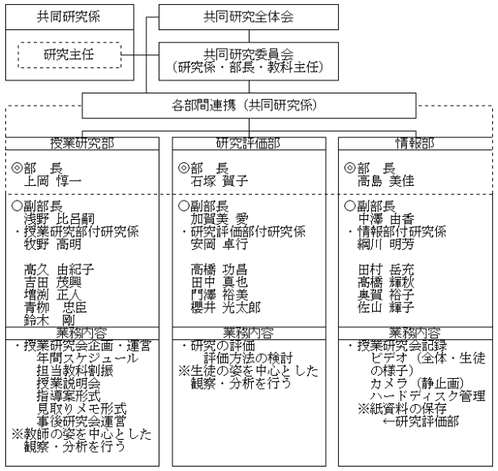


図２　全ての教科で必要とされる
「未来の創り手となるための資質・能力」

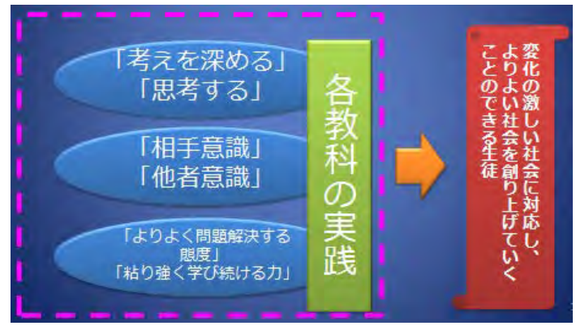


表 「未来の創り手となるための生徒像」と各教科で育てたい「未来の創り手となるための資質・能力」

「未来の創り手」となるための生徒像

変化の激しい社会に対応し，よりよい社会を創り上げていくことのできる生徒

各教科で育てたい「未来の創り手となるための資質・能力」

国語科
・「クリティカルな読みの視点」を生かし，言葉を吟味する力
・目的や相手を踏まえ，場面や状況を意識して言葉を使いこなす力
・目的や相手を踏まえ，必要な情報を取捨選択したり活用したりする力
・自分の思いや考えを，様々な人やものとの関わりで広げたり深めたりしようとする態度

社会科
・正しく社会を見つめ，主体的に社会と関わる人間（力）
・構想力

数学科
・日常の事象を数理的に捉え，数学を活用して論理的に考察する力
・数量や図形などの性質を見いだし，統合的・発展的に考察する力
・粘り強く考え，その過程を振り返り，考察を深めたり評価・改善したりする態度
・多様な考えを認め，よりよく問題解決する態度

理科
・単なる知識の獲得にとどまらず，主体的に粘り強く学び続ける力
・課題を解決する力
・協同性を発揮しうる人間関係を構築する力

音楽科
・曲想と音楽の構造や背景などとの関わりや多様性について考える力
・創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能
・音楽表現をするための創意工夫
・音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる感性

美術科
・創造的に考えを巡らせる
・自分らしさの意味や価値を追求する
・工夫する

保健体育科
・学びに向かう力
・他者と協同する力（協同力）

技術・家庭科
・持続可能な社会を創る力
・生活をよりよくしようと実践する力
・問題を発見する力
・互いに協力しながら課題を解決しようとする力
・課題を解決する力
・最適解を導き出す力

外国語科（英語）
・初めて出会う状況の中で，課題を見出し，それが何なのかを把握し理解できる。
・論理的・批判的に課題を見つめ，自分なりの考えを構築できる。
・相手の存在を意識し，相手に応じて伝わりやすく，分かりやすい表現方法を考えられる，また伝達できる。
・相手の考えを理解し，新しい価値に気付くことで，自分の考えを深めることができる。
・自分の表現が適切なものかどうかを自己評価したり，協同により相互評価したりしながら判断できる。

<エントリーシート> ※事務局記入欄 **No.：C - 18**	H31 年度部門 校内研修部門	学校名 松山市立坂本幼稚園
	活動名 幼児の育ちを伝える　～小規模園でも可能な発信の工夫～	

課題の設定：

幼児教育は主体的な遊びを中心に展開されるため、育ちや学びが捉えに難いと言われている。本園は小規模園であるため、幼児のみならず保護者とも個別の対応がしやすく、口頭でエピソードを交え幼児の様子や育ちを伝えることが多かった。しかし、保護者アンケートやフリー参観の振り返りから、十分に伝わっていない実態が浮き彫りになった。そこで、より伝わりやすくわかりやすい発信の方法を工夫することで、幼児の育ちや学びを伝えていくこととした。

方針･計画：

【発信の視点】
① わかりやすさ→写真やコメントによる可視化
② 共感しやすさ→新鮮な情報提供、育ちのプロセスを意識した場面抽出
③ 伝えやすさ→少人数の職員でも負担の少ない方法の選択
【期待される効果】
① 幼児の育ちへの理解推進
② 保護者･地域･小学校等との連携推進
③ 振り返り（幼児･児童･教師）に有効

活動内容：

１ヴィジブルな通信の発行、HP の活用
月刊「みんなで、わぉ！」、幼幼交流「くたにキッズニュース」等の随時配布（写真１・２）
HP「芝生化日記」を毎日更新
２おさんぽマップの充実
即日掲示した写真を学期ごとのマップに集約させ、常時掲示し保護者や地域の方に公開（写真３～5）
３幼小交流活動でのドキュメンテーションの活用
幼児や児童の次への期待や振り返り（写真６）、幼小教員の相互理解
４「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用
フリー参観、幼小連携、幼保合同研修等を通じて

活動の成果：

１幼児の育ちや教師の意図への理解が進んだ
① 「お友達と一緒の物を持つのがうれしいんですね。」「ここまで、歩いたんですね。体力も付いてきたんですね。」との成長に関する声が保護者から聞かれるようになった。
② 「先生が首飾り付けてたら、作りたくなりますね」「年長組の特権もあっていいですね。」と教師の意図を汲む声も聞かれる。
２対話が広がった
① 家庭での広がり
「通信の写真を見ながら、お友達の名前を次々教えてくれました。」「キノコを最初に発見したと、うれしそうでした。」との保護者からの声
② 幼小交流活動を行う５年生との広がり
ドキュメンテーションを見ながら「ヌルヌルしたね」「次は稲刈りだ」と振り返りや期待を共有（写真６）
③ 研修の場での広がり
ヴィジブルな記録や１０の姿を活用することで、園内研修や他校種間の意見交換が活発に。
３教師の心情の変化と幼児理解が進んだ
肯定的な反応が励みになり、発信者の意識が積極的に「伝えたい」という意識へと変化した。また、わかりやすい育ちの場面を撮ったりコメントを記したりする中で、より幼児の心情を捉えようとするようになった。
４教師の負担感が少ない発信となった
ヴィジブルな発信が好評であること、相互理解のツールとしての有効性を実感したことで、教師自身も楽しんで発信しており、負担感は少ない。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

･幼児の育ちを肯定的に理解する輪が広がった。
･幼児自身の活動の振り返りや見通しに有効であった。
･教師の意欲やスキルが向上し、少人数職員でも負担感の少ない発信となった。

（写真 1）月刊「みんなで、わぉ！」

（写真 2）くたにキッズニュース

（写真３）おさんぽマップ

（写真４）

（写真５）

登園時　目的地掲示　⇒　降園時　写真掲示　⇒　学期別マップに写真集約し再掲示

（写真６）幼小交流活動でのドキュメンテーションの活用

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C - 19**	部門 校内研修部門	学校名・氏名 新潟大学教育学部附属新潟中学校
	活動名 プログレスカードの活用 ～もう迷わない資質・能力の育成～	

課題の設定：

○経験年数，教科の違いによる指導方法のばらつきをなくし，資質・能力を確実に育成するシステムの構築
○新学習指導要領の資質・能力の育成の考えを取り入れたシステムの構築
○構築したシステムの実際の運用

方針・計画：

○課題解決のための仮説
　視覚的カリキュラムで，育成を図る資質・能力を単元・題材の目標として明確化する。また，プログレスカードにより，目標を明示化し単元・題材を運用するシステムを構築することで，教員の経験年数，教科の違いによる指導方法のばらつきをなくし，教科チームとして資質・能力を確実に育成することができる。
○計画
(1) 視覚的カリキュラムによる単元・題材の目標(資質・能力)の明確化

図１　視覚的カリキュラム

（例）
理科３年

運動と規則性
条件制御する，データ処理（グラフ化）する
視覚化（矢印など）する

図１の（例）理科では，「条件制御する」「データ処理する」など，育成を図る資質・能力「思考力・判断力・表現力等」の目標を明確化している。他の教科も，資質・能力の３つの柱（「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力，人間性等」）を基に目標を明確化する。

(2) プログレスカードによる目標の明示化ならびに単元・題材を運用するシステムの構築
　（１）の目標を確実に実践するため，図２の「プログレスカード」に明示していく。プログレスカードとは，教科学習に対する生徒の学びの変容・成長を可視化するポートフォリオである。１つのカードで，①単元の始め②中③終わりの３つの場面での生徒の学びの変容を可視化，記録できる。

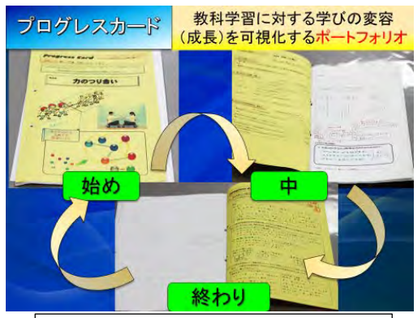


図２　プログレスカード

①単元の始め
何をできるようになることが期待されているかを生徒に示す学習シラバス的機能。
→ 目標を明示化することで，生徒が学ぶ目的や見通しを持つことができる。
②単元の中
生徒自身が課題達成の様子を確認するモニター的機能。
→ 自己評価・相互評価する項目を設定することで，生徒が自身の学習内容の理解度を確認することができる。
③単元の終わり
生徒自身が学習成果の評価を実施，記録し，教師に伝えるセルフレポート的機能。
→ 単元を通してできるようになったこと，新たに興味を持ったこと，調べてみたいことなど，生徒自身が学習成果をまとめることで，自身の成長を可視化することができる。

活動内容：

活動の内容と流れ

当校では，今年度，全教科でプログレスカードを導入した。全教科で年間カリキュラムや育成を図る資質・能力を共有することで，教科等横断的な視点から資質・能力を確実に育成しようとする職員の意識やシステムを構築することができた。PDCAサイクルに沿って，システムの流れを下記に示す。長期休暇中(春休み，夏休み，冬休み)に職員研修を実施する。

活動の成果：

課題に対して，以下のようなプラスの変化があった。
○教科チームとして，共通の目標に向けた単元・題材指導の展開
　プログレスカードにより生徒全員に共通の目標を示していることから，統一した指導ができるようになった。また，定期テストでは，知識，技能を問う問題だけではなく，単元・題材における思考力・判断力・表現力を問う問題を実施することが可能となった。
○教員の教科マネジメント力の向上
　プログレスカードの形式や内容を統一することで，若手教員もプログレスカードを利用した指導が可能となり，全教員が単元・題材の目標を意識し教科マネジメントできるようになっている。
○生徒が見通しを持ち学習に取り組むことが可能となる効果（生徒アンケートより）
『今まで理科の実験を終えたときに「自分は何をしていたんだろう」と思うときがありました。プログレスカードを使うようになってから，実験はこのために行うという目標が明示されるようになったので，実験が終わった後に目的が理解できるようになりました。また，テスト前にもプログレスカードに単元のポイントをまとめてあるので，自分にとっての学びのポイントがわかるようになりました。プログレスカードがあるかないかで全然違います。』

アピールポイント（アイディアや工夫）：

○視覚的カリキュラムとプログレスカードの連動による教員への効果（教員の経験年数，教科の違いによる指導方法のばらつきの改善）
○プログレスカード導入による生徒への効果（教科学習に対する生徒の学びの変容・成長を可視化するポートフォリオ）
○PDCA サイクルに沿った運用の実現

【参考引用文献】

○ 松沢伸二　著（2002）『英語教師のための新しい評価法』大修館書店
○ 田村　学　編著（2017）『カリキュラム・マネジメント入門－「深い学び」の授業デザイン。学びをつなぐ７つのミッション。－』東洋館出版社

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1 】

<エントリーシート>

※ 事 務 局 記 入 欄

No.：C - 20

部門

校内研修部門

学校名・氏名

大阪府立だいせん聴覚高等支援学校
加藤　智亮

活動名

全ての教室でＩＣＴ
-聴覚障がい生徒の情報保障の拡充による進路指導の充実と学力の向上-

課題の設定： ○合理的配慮を考える土台づくり

・聴覚支援学校において情報保障は必須である。聞こえの障がいからくる不便さを軽減し、生徒の可能性を最大限に引き出しながら、力を発揮できる学校環境の整備
・22 世紀型の授業への挑戦、授業の創造－新しい授業の在り方と情報リテラシー教育の確立（本校の特色づくり）
・タブレット型 PC の活用による自己表現力の向上と情報活用能力の向上

方針・計画：

（1）聴覚障がい生徒一人ひとりの実態に応じた進路指導、学力の向上
　○社会的自立に向けた生徒の意識改革と学校風土の醸成
　○基礎学力の定着・発展と国語力の伸長
　○個別指導の充実による国語力・英語力の向上、大学進学率の向上。
（2）聴覚高等支援学校として、より質の高い教育の提供
　○教職員一人ひとりの資質と専門性の向上（授業力、教材開発）

活動内容：

・ 普通科全教室に電子黒板の導入し、多様なコンテンツ、双方向性の ICT 活用の授業を普通教室で 100%可能とすることで、聴覚障がい生徒の情報保障を促進する。
・ 電子黒板とタブレット型 PC の併用により、グローバル人材育成の基礎となる「自ら発信する力」を育成し、国語力・英語力の向上を図る。
・ 生徒全員へのタブレット型 PC の配付、教室のネットワーク環境の整備により、インターネット活用教科の自主学習習慣を醸成し、大学合格や、就労に役立つ資格試験などの資格取得率等を向上させる。
・ 情報科で基本的なプログラム言語を学習し、オリジナルアプリの作成に取り組む。
・ ICT 活用、授業研究、教材開発において経験と知見を深めることで、教職員の聴覚障がい教育の専門性を高める。

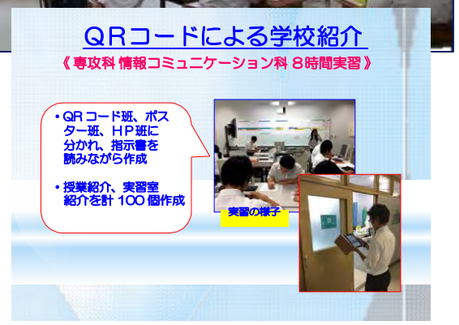
活動の成果：

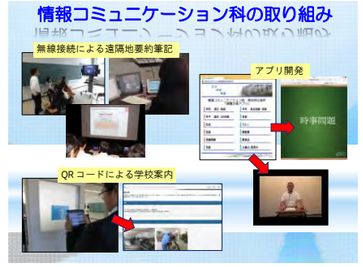
①タブレット型 PC の基本操作の実態を導入時のベースラインとして、定期的に生徒全員に効果測定を行い技能習得を検証した結果、２年目には 100%の生徒が基本操作可能となった。また、自学自習習慣の定着により、計算技術検定、英語検定、漢字検定等の合格率の向上するとともに、希望する大学への進学率が 85%に向上した。
②校内の文字情報システム、PC、電子黒板、タブレット型 PC など多様な ICT 機器を活用した授業の実践をまとめ、対外的な発表を行うとともに報告集にまとめた。
③情報科では生徒は基本的なプログラム言語を習得し、作成したプログラムを校内で活用して、本校オリジナルソフト集を作成できるレベルになった。その結果を府立高校等に発信し、聴覚障がい生徒の指導支援ソフトとなった。
④活動への取組みを通して、教職員の ICT 活用能力が高まり、授業力や専門性とともに総合的に学校力が向上した。

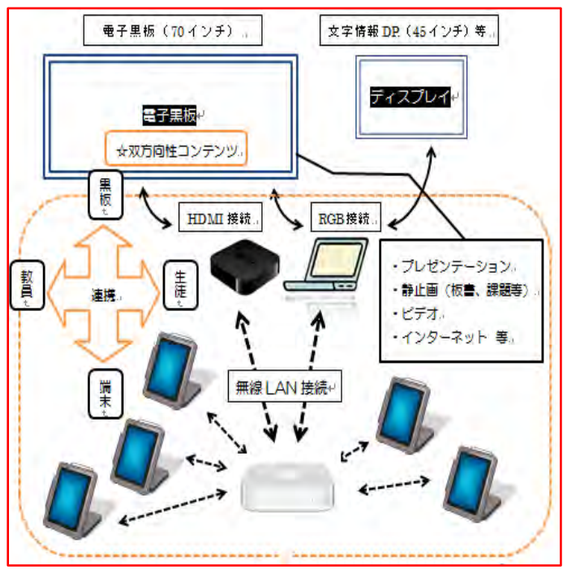
アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

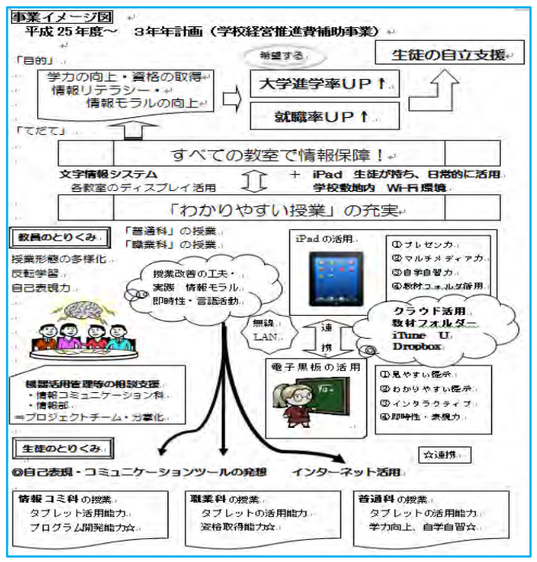
①校内 ICT 環境の構築と、各生徒へのタブレット型 PC の提供による ICT 活用スキルの育成。
②校内の文字情報システム、PC、電子黒板、タブレット型 PC など多様な ICT 機器を活用したインタラクティブ授業の実施。
③ICT 機器を活用し、大学受験対策、資格試験などに生徒が自主的に取り組むことによる、資格試験の合格率や希望する大学への進学率の向上。
④情報科ではオリジナルアプリを開発、普通科の授業で試行しながら完成度を高め、プログラム開発の環境を整備。
⑤本研修活動は、聴覚高等支援学校だけではなく、幅広く高等学校にも活用できる汎用性のある活動である。

<写真、図表添付欄>









※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

<エントリーシート>

※事務局記入欄

No.：C - 21

部門

校内研修部門

学校名・氏名

大阪府立和泉支援学校

活動名

私立学校支援体制の検討
―特別支援学校と教育委員会の連携―

課題の設定：

公立諸学校に対しては、就学前の幼児から大学生まで連続性のある支援が検討・実施されているが、行政管轄の違い等の実際的な課題がある私立学校に対する支援は稀であり、システム化されていない。そのような現状の中、大阪府では教育庁内に私学課が編入された経緯から、私立学校から特別支援学校に対して支援の相談依頼があった。広い通学域をもつ私立学校への支援を継続するために、特別支援学校と学齢簿のある教育委員会（以下、教委）が協働し、私学支援システムの検討と実践を進めることにした。

方針・計画：

大阪府センボク市（仮称）在住、私立 X 中学校 1 年男子生徒 A についての相談依頼があり、支援の検討が始まった。生徒 A は、人間関係形成やコミュニケーションの困難さを背景に、同級生・教員に対する暴言・授業妨害、授業への参加拒否等を頻発する状態にあった。

実態把握の結果、生徒 A は「発達障がいに起因する認知機能やソーシャルスキルに課題があり、指導には継続性が必要」「義務教育段階にあり、学齢簿がセンボク市教育委員会にある」「私立 X 中には個別指導できる部屋も人材もない」との現状が明らかになり、「①支援や指導のシステムと連携のあり方」を検討し、そのシステムを実働させることで「②教育的ニーズに応じた指導・支援」に取り組むことにした。

活動内容：

支援や指導のシステムと連携のあり方については、特別支援学校・市教委・私立 X 中三者が、図 1「支援コーディネーター（以下、Co）チームづくり(案)」を共有し、私学にも Co を設置し、三者が協働する必要性等を共通認識して、私学支援システムを形成した。実際の支援は、およそ週 1 回 1 時間の頻度で、市役所の一室に、和泉支援学校スタッフ・前籍小学校の特別支援教育 Co・市教委指導主事及び本人が集まり、「他校通級」形態による支援と指導を実施した（写真 1 は初回の様子）。なお、支援時間は放課後とし、現籍私立 X 中 Co とは、指導実施ごとに電話やメールで学習内容や引継ぎ事項を確認した。指導内容は、主にコミュニケーション（写真 2）・認知コントロール（図 2）・自己理解（図 3）を課題として構成し、取り組んだ。

活動の成果：

事後評価では、メリットとして「本人が通う形態で、支援者側の負担が少ない」「計画的で連携した取り組みができる」「結果的に、Co の実践的研修になる」「新たな連携のあり方をつくれた」等があげられた。一方、デメリットとして「活動が放課後のため、支援時間が制限される」「現籍私立学校 Co と共有しづらい」「件数が増えたら、対応しきれない」等があげられた。本事例の私学支援システムには、通級指導の形態に特有の課題がみられたが、特別支援学校・市教委・私立 X 中が連携した支援のメリットが明らかになると同時に、まとめの報告会を実施することで、私立 X 中教員全体の指導力・支援力の向上につなげることができた。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

・今まで稀だった「教育委員会・私立学校・特別支援学校の連携・協働」。協働によるそれぞれのスキルアップ。
・特別支援教育のノウハウを活かした私立学校支援。私立学校教員の指導力・支援力の向上。
・市役所に生徒本人が通う「他校通級」形態による支援や指導。

<写真、図表添付欄>

図 1 関係機関で共有・共通理解した「支援コーディネーターチームづくり(案)」

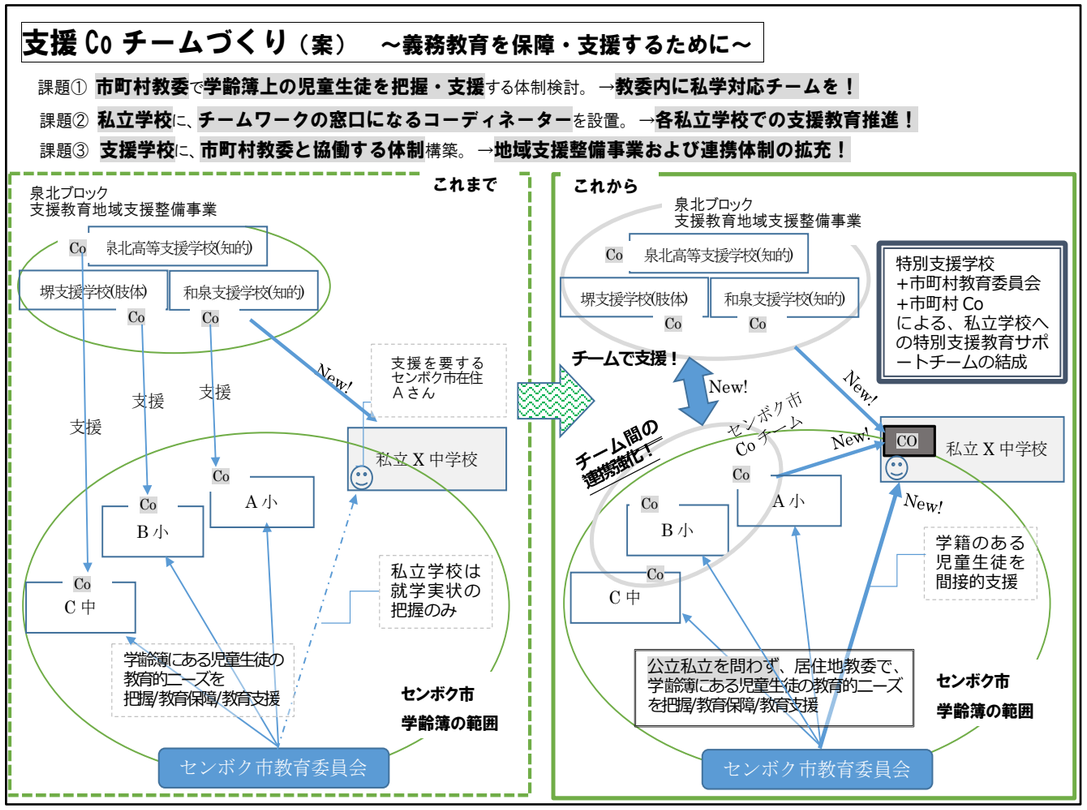


写真 1 「他校通級」形態による指導（初回）

図 2 認知コントロール課題「違った考えをしてみよう」

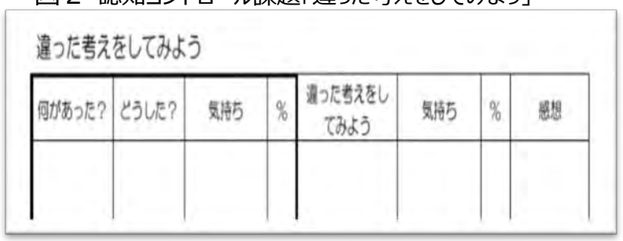
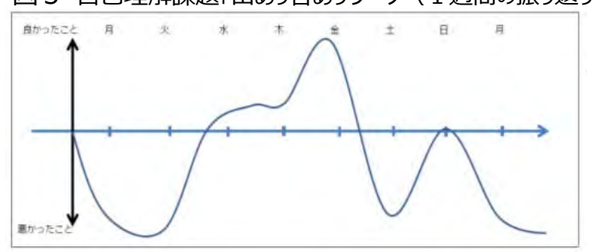


写真 2 コミュニケーション課題「風船バトミントン」

図 3 自己理解課題「山あり谷ありワーク（１週間の振り返り）



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C-22**	部門 校内研修部門	学校名・氏名 宜野湾市立 嘉数中学校・校長 仲田 丘
	活動名 主タイトル（12 文字以内）子どもと共に育つ組織 副タイトル（16 文字以内）ICR を活用したチーム支援 ※どのような課題をどのような手法で解決したのか、わかりやすく伝える案件名を記入してください。	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

通常学級における発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒は、文科省の調査により 6.5%在籍することが明らかにされている。しかし、支援が必要な児童生徒、必要な支援の実態把握は、教員の主観・経験に依存し、支援内容の妥当性は不確かである事が多い。その結果適切な支援が出来ず、本校においても、長らく生徒指導困難校として課題を抱えてきた。このような状況は、教員の無力感や疲弊感に繋がり、また、学校全体の雰囲気の悪化等、負のサイクルを招いていた。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

上記で挙げた課題に対し、支援の必要性のある生徒への対応に焦点をあて、下記活動を計画した。

1．組織的な教育支援を必要とする生徒を支えるための校内体制の構築
- 教員の専門性と実践力を高めるための校内研修会の開催

2．教育的な支援ニーズの高い生徒への適切な関わり
- ICR（IN-Child Record の略）を活用したケース会議による生徒の詳細な実態把握（図.1）
- ICR による定期的な支援評価（振り返り）を行い、個々の支援ニーズに合わせた関わりをもつ

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

生徒を支える体制の構築	生徒支援の実践
➢ 専門家（琉球大学教育学部特別支援教育、韓教授ら研究チーム）による教育支援 ➢ 理論と実践を基軸にした校内研修の実施 - ICR の意義と活用法 - ADHD、ASD、SLD 等への理解と対応 - 学年職員を中心とした模擬ケース会議	➢ ICR による生徒の実態チェック（担任・学年） ➢ ケース会議及び支援の実施 ① 生徒の多面的・多角的な実態把握 ② 支援の方向性・具体的な手だての協議 ③ 支援の実施 ④ 支援ニーズの再確認・支援内容の修正⇒③へ

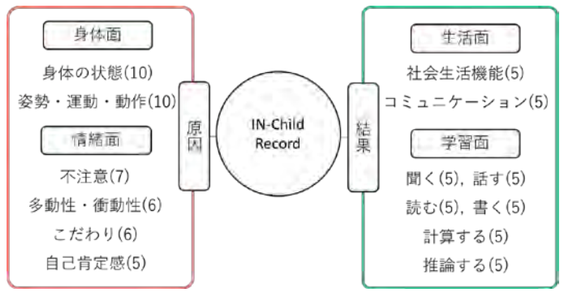
活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

- **生徒の変化**
  - ICR で評価した支援ニーズの改善（図.２、図.3）
  - 学校全体として、お互いを認め合う校風が育ってきた
- **教員の変化**
  - 多面的・多角的に生徒を理解し、教育的ニーズに合わせた組織的な支援の必要性が認識できた
  - 組織的な取組による生徒の変容を機に、教員の自信獲得と教職への満足度が向上（表.1）

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

- ケース会議における ICR の活用が支援の方向、手だてに信頼性と妥当性を与え、教師に自信が備わった
- 学年単位のチームで支援を進めるため職場に連帯感が生まれ、些細な事でもためらわずに相談、協力できるようになった。長期的に支援方法を検証し、改善していくので、担任は安心で疲弊感がない
- 個に対して打ち出した方針や手だてを類似傾向のある生徒に汎用できることが本研修の強みである

図.1 IN-Child Record

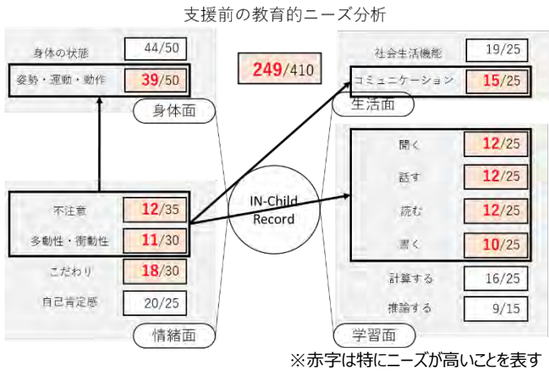


IN-Child Record（ICR）とは

「発達の遅れ、知的な遅れ又はそれらによらない身体面、情緒面のニーズ、家庭環境を要因として、専門家を含めたチームによる包括的教育を必要とする子」に対して、子どもが抱えている教育的ニーズを把握するための評価ツール

- 教育現場で見られる子どもの様子を評価
- 大きく４つの側面(14 領域，82 項目)から、総合的に子どもの実態を把握
- 信頼性・妥当性の検証された科学的ツール

図.2 ケース会議を通した支援内容の検討



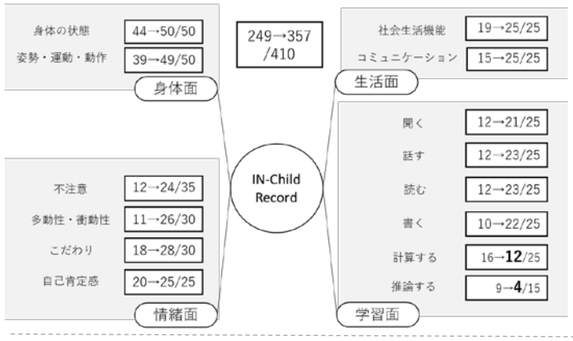
※赤字は特にニーズが高いことを表す

生徒が見せる様子
授業中席に座ることが出来ず、床に寝転んだり、友達の席まで行ってお喋りをしたりする。学習の準備をせず、活動にも参加することが出来ない。

ICR から見る生徒の教育的ニーズ
不注意と多動性・衝動性が強く、席に長時間座り、活動に集中することが難しい。また、一斉指示を聞くことが出来ていない。

支援方法
- 学級内でリーダー的な役割を与える
- 指示の個別化や集中を促す声掛けの実施

図.3 支援を通じて改善が見られた事例



生徒の変化（６か月間の支援）
➢リーダー的な役割をこなす中で自分の行動を調整
➢学習に取り組む際の声掛けによって授業に集中

○1 学期中間→2 学期期末　席次 **90** 位向上

本生徒の成長が、学級内に学習に向かう雰囲気を生み、学級全体の学習態度が向上。

不注意や多動性・衝動性といった情緒面の教育的ニーズが改善することに伴って、学習をさらに向上するために、担任教員によって、計算や推論が教育的ニーズとして捉えられるようになった。（左図太字）

表.1 教員の変化

背景黄：宜野湾市平均より良い項目
赤字：経年的に改善した項目

教員ストレスの軽減，仕事の満足度向上が見られ、生徒が変化していくことによって、教員の意識が変わり、本校の教育活動の充実化につながっている。

	A									B						C			D
平均値	心理的な仕事の負担・量	心理的な仕事の負担・質	自覚的な身体的負担	職場の対人関係上のストレス	職場環境によるストレス	仕事の裁量度	技能の活用度	自覚的な仕事の適正度	働きがい	活気	イライラ感	疲労感	不安感	抑うつ感	身体愁訴	上司からの支援	同僚からの支援	家族や友人からの支援	仕事や生活の満足度
全国	8.7	8.6	2.0	6.3	2.3	7.9	3.0	2.8	2.8	6.7	6.5	6.5	6.2	10.3	18.2	7.5	8.1	9.9	5.7
宜野湾市	9.2	8.9	2.6	5.8	2.1	8.0	3.2	3.0	3.3	7.2	6.1	6.7	6.0	10.0	18.6	8.2	8.7	9.9	6.2
H28	9.4	8.4	2.6	5.5	1.8	7.9	3.4	3.2	3.5	7.7	7.2	7.4	6.1	10.2	17.8	8.5	9.3	10.1	6.2
H30	9.1	9.0	2.5	4.8	1.4	8.5	3.5	3.2	3.6	8.8	5.7	5.7	5.6	8.2	17.3	9.2	9.7	10.7	6.6

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

<エントリーシート> ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C - 23**	部門 校内研修部門	学校名・氏名 寝屋川市立　石津小学校
	活動名 チームで高まる校内研修 ～学年縦割り部会の大いなる可能性～	

課題の設定：

課題：ほとんどの教員が学習指導案検討の経過を知ることなく、研究授業を参観する体制になってしまっているため、討議会での深まりがそれほど感じられない。校内全体で効果的に研究を進められていない。
目標：指導案検討に積極的に関われる体制を構築することが、研究テーマに迫るためのより活発で効果的な討議会へと繋がり、校内全体で研究を推し進めていく風土ができあがる。

方針・計画：

①指導案検討会の部会を従来の横つながりの枠組みを超え、低・中・高学年の教員が交ざった「縦割り部会」に変更。（図１）（研究主題構想図との関連）（図２）
②指導案検討会の進捗状況を掌握し、非授業者の意見を反映することができる場の設定。
③指導案検討への関わり方を視覚化した「ルーブリック」の作成・活用。

活動内容：

研究推進部会で「校内研究ルーブリック」（図３）を作成し、全職員に配布した後に適宜活用に関して声かけを行った。それと並行し、縦割り部会の指導案検討内容の報告、意見交流を複数回行い（写真１）、研究授業当日を迎えられるようにした。年度末には、年度末反省と併せてルーブリックの活用の効果や以前の部会のもち方と比較しながら縦割り部会の効果についてアンケートを行った。

活動の成果：

従来のものから縦割り部会への変更を提案する際には、「学年を越えると予定を合わせるのが困難」「打ち合わせが増えることでより多忙化する」という不安感が表出されたが、実施後の年度末反省では、「自分がどうかかわればよいかルーブリックに詳しく書かれているので確認しやすかった」「研究推進部が予定を調整してくれたので、円滑に進められた」「他学年と指導案検討を進めることで、自分の学年とのつながり（系統性）についても考えることができた」「事前に児童の実態や本時の山場を知った上で授業を見られたので、児童の反応などをじっくり見ることができてよかった」など、肯定的な意見が多く見られた。またそれと併せて行った教員アンケートでは、多少の人員の変化はあるものの、校内研究が組織的かつ計画的に行われたと感じている教員が大幅に増加していることや、討議会の質の向上にも相関があることが読み取れる。（グラフ１）
このように、教員の関わり方を視覚化し、多様に関わり意見を伝え合う時間や場を意図的に設けることで、校内研究が組織的かつ計画的に行われ、その後の討議の活発化につながることが考えられる。一部の教員だけではなく、「チーム学校」として研究を推し進めていくことが学校力の向上につながり、如いては児童の資質・能力の向上につながると考えられる。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

・学習指導案作成の経過を学校全体で確認する機会を設けることで、より深く授業を観ることができ、討議会の質を高めることにつながる。（討議の質の向上→学校力の向上→児童の資質・能力の向上）
・縦割り部会による指導案検討は、系統性を意識した多様な意見交流を生み出し、討議会の質を高めると同時に、担当学年だけでなく、学校全体で児童の資質・能力を育てようとする風土が構築されることにつながる。
・主観ではなく、データに基づき、取り組みの効果を図る研究体制の構築。

＜写真、図表添付欄＞

図１．従来の学年部会から縦割り部会への変更

（例）１年（授業者）．２年．担外．支援
↓
１年（授業者）．３年．５年．担外．支援

図２．研究主題構想図との関連

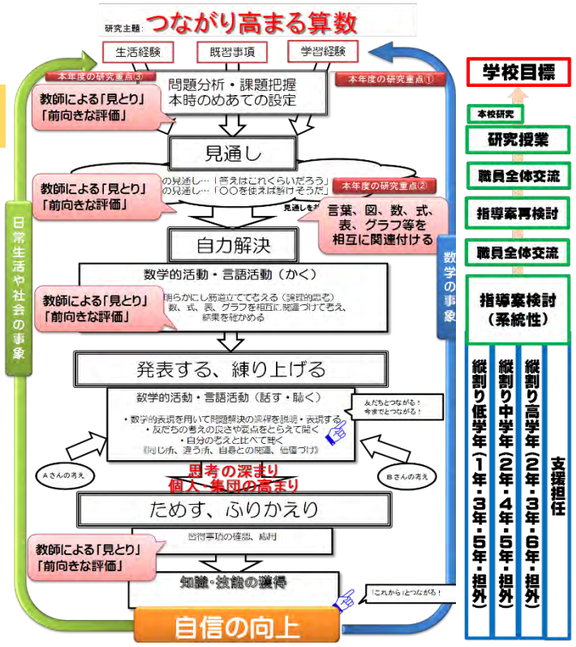
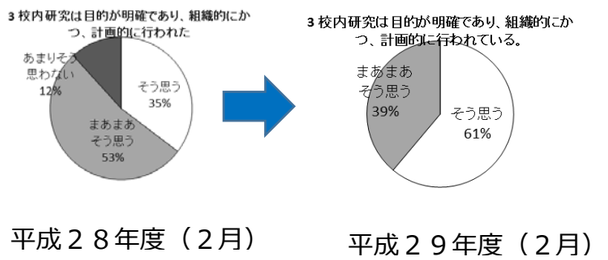


図３．校内研究ルーブリック

グラフ１．校内研に関する教員アンケート結果の変容



平成２８年度（２月）　平成２９年度（２月）

平成２８年度（２月）　平成２９年度（２月）

写真１．指導案に関する意見交流の様子

＜エントリーシート＞	校内研修　部門	桑折町立醸芳小学校
Ｎｏ．：　C-24	「深い学び」に向けて ～体制づくりと授業改善～	

課題の設定：

本校は、平成２９年度より福島県教育委員会の「『学びのスタンダード』推進事業」におけるパイロット校の指定を受け、授業改善の先駆者としての役割を担っている。新学習指導要領への移行の時期でもあり、改訂の趣旨でもある「主体的・対話的で、深い学び」の実現に向け、子どもの深い学びへ向けた体制づくりと授業改善に取り組むことで、生きて働く思考力・判断力・表現力を育てたいと考えている。

方針・計画：

子どもの「主体的・対話的で、深い学び」の実現に向け、以下の視点で取り組んできた。
①「学校の組織的な対応」（協働性を生かした教員研修）
②「授業における教師の子どもの見取りとコーディネート」（学びの連続性の保障）

活動内容：
①　「教科担任制」による専門性の高い授業へ向けた体制づくり
②　福島県版「授業スタンダード」を取り入れた授業改善
③　討論形式による授業研究会

活動の成果：
①　児童の変容
- 　学力調査の算数科において、活用力を問う問題で伸び幅が大きい。
- 　課題に主体的に向き合い、意見交換（交流）を通して考えを考えをつなぎ自分の考えを深める姿が見られるようになった。

②　教師の変容
- 　学びの履歴をもとにしたコーディネートを行うようになった。
- 「授業スタンダード」視点に基づき、具体的な子どもの姿をもとに授業研究をする姿が見られ、教師集団としての力が向上しはじめている。

アピールポイント（アイディアや工夫）：
○　算数科の教科担任制においては、算数科の授業だけではなく家庭学習についても、教科担任が関わることで、授業と家庭学習の学びの連続性を図る。
○　福島県版「授業スタンダード」をもとに、単元で育てる汎用的能力を明らかにし、全ての教科においてどの教員も同じ視点で指導することで、教師の力量アップとともに指導のブレがなくなってきた。
○　討論形式による授業研究会を取り入れたことにより、経験年数や専門教科の違う教員が、それぞれの立場（様々な視点）から意見を出し合うことで、話し合いが深まるとともに、教師集団としての力量が向上した。

＜教科担任制＞

	5年1組	5年2組
算数 T1	算数専門の教師	
算数 T2	担任	担任

	5年1組	5年2組
理科	理科専門の教師１	

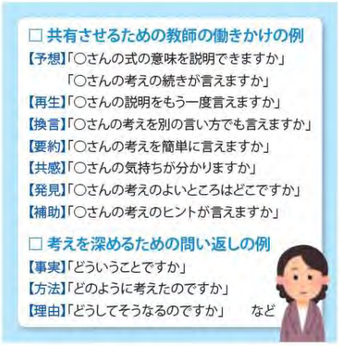
	6年1組	6年2組
音楽	音楽専門の教師 （２組担任）	

	6年1組	6年2組
理科	理科専門の教師２	

	4年1組	4年2組
図工	図工専門の教師	

	3年1組	3年2組
書写	書写専門の教師	

＜教師の働きかけ（県版『授業スタンダード』より）＞



＜単元で育てる資質・能力（算数科）＞

4　単元の構想（総時数７時間）

時	◎　主な学習内容 ○「数学的な見方・考え方」 △「評価規準」	問題発見・解決過程との関連 ①見いだす力	②実践する力	③活用する力	④考える力	⑤解釈する力	⑥表現する力
1 本時	◎面積，匹数が異なる場合の混み具合の比べ方を考える。 ○異なる二つの量の割合としてとらえられる数量の関係に着目し，比べ方を考える。 △異なる二つの量の割合としてとらえられる数量の比べ方について考え，理解している。【数学的な考え方】【知識・理解】	○	○		○		
2	◎面積や匹数の単位量当たりの大きさを用いて比べる。 ○異なる二つの量の割合としてとらえられる数量の関係（比例関係）に着目し，単位量当たりの考えを活用する。 △単位量当たりの大きさを用いて比べることの意味を理解している。【知識・理解】		○		○		○
3	◎「人口密度」の意味を知り，人口密度を求める。 ○異なる二つの量の割合としてとらえられる数量の関係に着目し，目的に応じた処理の仕方を工夫する。 △「人口密度」の意味を理解し，人口密度を求めることができる。【知識・理解】【技能】			○		○	
4	◎米のとれ具合を単位量当たりの大きさを用いて調べる。 ○異なる二つの量の割合としてとらえられる数量の関係に着目し，目的に応じた処理の仕方を工夫する。 △単位量当たりの大きさを用いて２つの資料を比べることができる。【技能】			○		○	
5	◎「力をつけるもんだい」に取り組む。 ○異なる二つの量の割合としてとらえられる数量の関係に着目し，目的に応じた処理の仕方を工夫する。 △学習内容を適用して，問題を解決することができる。【技能】			○		○	
6	◎身の回りから単位量当たりの考えを使っている場面を探す。 ○異なる二つの量の割合としてとらえられる数量の関係に着目し，単位量当たりの考えのよさを感じる。 △学習内容を適切に活用して，活動に取り組もうとしている。【関心・意欲・態度】	○				○	
7	◎「しあげ」に取り組む。 ○異なる二つの量の割合としてとらえられる数量の関係に着目し，目的に応じた処理の仕方を工夫する。 △基本的な学習内容を身につけている。【知識・理解】			○		○	

①**数学的な問題を見いだす力**⇒物事を数・量・図形などに着目して観察し、単純化して算数の問題とする。
②**問題解決のための構想・見通しを立て実践する力**⇒解決の方針を立てる。試行錯誤・類推的・帰納的・演繹的考え
③**情報を活用する力**⇒情報を分類整理したり、必要なものを適切に選択し判断したりする。
④**振り返って考える力**⇒統合的・発展的に考える。よりよい考えや結果に改善する。一般的・多面的に考える。
⑤**事象を数学的に解釈する力**⇒数学的な結果を基の事象に即して考える。
⑥**数学的に表現する力**⇒数学的な表現を用いて簡潔・明瞭・的確に表したり、目的に応じて柔軟に表したりする。

＜教師のコーディネートによる授業での学び合い＞

＜討論形式の授業研究会の様子＞

＜児童の変容

（『全国学力・学習状況調査』より）＞

	平均正答率（全国と本校との差）の変容 （平成 29 年度と平成 30 年度の結果より）
国語 A	＋7．1
国語 B	＋3．8
算数 A	＋5．1
算数 B	＋7．6

<エントリーシート>

※事務局記入欄

No.：C - 25

部門

校内研修

学校名・氏名

安芸太田町立筒賀小学校

活動名

主タイトル：命を守り心を育む防災教育

副タイトル：地域と協働する協調的学びを通して

課題の設定：

○地域の自然環境からの派生が予想される土砂災害や地震等への危機意識と対応力が乏しい。
○児童の実態として，自ら身の周りの課題に気づき進んで課題解決に向かおうとする意識が乏しい。
　以上のことから，防災をテーマに，地域の自然や人から学ぶ活動を通して，自然災害から自他の命を守ることのできる資質・能力の育成を図る。

方針・計画：

育てたい資質・能力「感じる力」「考える力」「実行する力」を踏まえ，教科横断的なカリキュラムを構想。
○「環境」と豊かに関わる学習を工夫すれば，自他を尊重し，「いのち」の大切さを実感するであろう。
○各教科等の内容と防災とを関係付けた指導を工夫すれば，防災への適切な判断をするであろう。
○学校行事等で学習したことを発信する機会を意図的に設定すれば，地域防災に資するであろう。

活動内容：

○考 える活 動‥天上山登山，地域のボランティア清掃，高齢者福祉センター訪問等［写真１］
○え る 活　動…「いのち」について考える道徳，総合的な学習での防災に係る学習等［写真２］
○実行する活動…運動会種目演技，赤十字救急法講習会，土砂災害防止教室等［写真３］
　地域の自然環境を体験的に学ぶことを基盤に，年間を通じての教科横断的な学びを通して，自然・命・防災を一体的かつ多面的・多角的に考えることにつなげた。

活動の成果：［資料 1］

筒賀防災参観日（H30.9.28）でのアンケートでは，参加者から次のような声を頂いた。［写真４］
○「子供たちがよく考え，みんなで意見を出し合い，話してまとめているところがすごい。防災だけでなく色々な所で生かせると思う。」
○「家にいて Ｊアラートが鳴った時，迷うことなく机の下に入りじっとしているという行動ができており，びっくりしたことがある。大人でも動けなくなるのに…。学習のおかげ。
○「めあてに沿って班ごとに考えを出し合う姿が印象的だった。低学年なのに，考えを発表したり，質問したりと自発的，意欲的に授業に参加しているところに驚いた。」
　これらのアンケート結果から，危機回避能力の定着や自ら主体的に学ぼうとする汎用的な力の成長が伺える。また，家族で防災について考えるよいきっかけづくりになるとともに，児童の意識実態などから学習内容や指導方法についての課題を明らかにすることができた。カリキュラム改善につなげたい。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

○急峻な地形や筒賀断層の存在から，土砂災害や地震の危険性が高いという地域特性を踏まえた。
○総合的な学習・道徳・特別活動を中心とした教科横断的カリキュラム・マネジメントにより，防災・自然・命を一体のものとして捉えた多面的・多角的なものの見方考え方の育成を図った。
○児童の主体的な学びの姿がみられるようになり，児童会の生活課題改善の活動がみられるようになった。
○広く保護者や地域に防災の取組の重要性について発信することができた。
○青少年赤十字の研究指定校として取組を進め，研究会を通して普及することができた。。

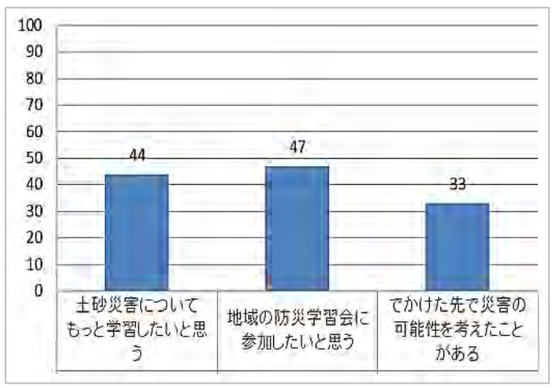
［写真１］

［写真２］

［写真３］

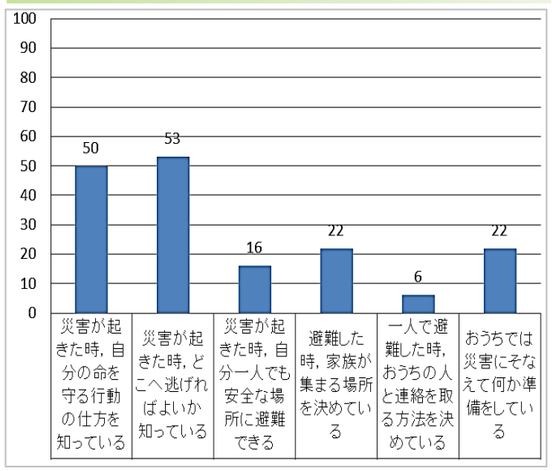
［写真４］

地域防災に関する意識調査　（H30.9）



［資料 1］

児童が校外や自宅にいる場合を想定した意識調査（H30.9）



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C-26**	部門 校内研修部門	学校名・氏名 鹿児島市立伊敷中学校
	活動名 汎用的な資質・能力の育成 ～教職員と生徒の意識の共有に向けて～	

課題の設定：

本校では「新しい時代を切り拓く資質・能力を身に付けた生徒の育成」という研究主題を掲げ、３年前からアクティブ・ラーニングに関する研究を進めている。 昨年度までは「教科で目指す資質・能力」を中心に研修を進め一定の成果が得られた。一方で、カリキュラム・マネジメントの一つの側面である教科横断的な視点はなかなか浸透せず，職員や生徒の認識が低いことが見えてきた。そこで今年は、「汎用的な資質・能力」の育成に焦点を当てて研究を実施することにした。

方針・計画：

職員研修や教科部会において、「汎用的な資質・能力」のルーブリックを基に、授業中における具体的な生徒の姿を共有する。また、「汎用的な資質・能力」を生徒と教職員が共に考える場を設定したり、ルーブリックシートを生徒に持たせたりすることで，日々の授業や教育活動で生徒自身が意識して活動できるようにする。

活動内容：

1　職員研修において，ルーブリックを具体化し共有する取組。

本校ではこれまでに「汎用的な資質・能力」を（課題発見力・情報活用力・論理的思考力・協働する力・メタ認知）と捉え，ルーブリック化する試みを行っていた。しかし，資質・能力を定義づけるだけでは，職員間に浸透しない。そこで，生徒の生活場面で言えば，また教科の授業レベルで考えれば具体的にどういう姿になるのか，職員研修で話し合い，全教職員で共有化を図った。

【ＢＥＦＯＲ】

	❶課題発見力
レベル４	日常生活の中から自ら課題を発見していくことができる。

【ＡＦＴＥＲ】

生徒の具体的な姿を想定して，指標を捉え直し，イラストや発言例を加えて生徒に伝わるルーブリックを目指した。

2　職員研修で話し合った「資質・能力」観を生徒に伝える取組。

「なぜ資質・能力なのか」。改めて未来を見据えることで，教員の生徒観を編み直す。また，それを生徒自身にも伝え，意識を共有することを目指して職員研修を行った。

【内閣府が示す新たな社会ソサエティ 5.0 を職員で視聴し，生徒観を編み直す】

ＩＴを理解して新たな産業を生み出していく力がやはり必要だ，と思いました。

【生徒自身にもソサエティ 5.0 を見せ，教員の思いや願いを伝えてルーブリックを手渡す】

今度の文化祭では，協働する力レベル４を目指して活動できました。

この職員研修によって，未来社会の変化に戸惑いつつも，改めて研究の意義を捉え直し，資質・能力の育成に向けて具体策を話し合うことができた。その具体策の一つとして，ルーブリックを生徒と共有することで，生徒自身が資質・能力を語り出すようになり，職員が手応えを感じている。

活動の成果：

1　学校全体として何を目指してどのような研究・実践をしていくべきかを職員間で意見交換を行うことによって，汎用的な資質・能力について理解を深めることができた。

2　生活場面や各教科の授業レベルで生徒の姿を具体化させることによって，汎用的な資質・能力の育成のための手立てや見取り方等を検討するようになり，実践へとつなげることができた。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

○「汎用的な資質・能力」のルーブリックの活用

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞

※ 事 務 局 記 入 欄

No.：C-27

部門

校内研修部門

学校名・氏名

かえつ有明中高等学校　サイエンス科・プロジェクト科

活動名

教科横断の学校改革
～探求に向かうスキルとマインドとは～

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

- 生徒に「考えなさい」「発表しなさい」「話し合いなさい」と言いながら、学校ではその方法を教えていなかった
- 教科が違う教員と教育について本音で語り合ったり、学びあうための場所がなかった

→全ての教科の教員がこの科目を担当し、どの科目でも共通して必要な、考えたり、対話したり、表現するためのスキルやマインドを育成することを目指し、オリジナル科目のサイエンス科・プロジェクト科という科目を 14 年前に立ち上げた。プログラムの開発に学校全体で取り組んでいる。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

- 各科目からサイエンス科・プロジェクト科を担当する教員を選出
- どの科目でも必要な探求のためのスキルやマインドを育成するための授業を組み立てる
- 中学サイエンス科では週に 2 時間、高校プロジェクト科では週４～８時間実施
- 毎週 1 時間、サイエンス科・プロジェクト科の研修兼ミーティングを実施

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

- 最初の数年はブルームのタキソノミーを基にした「考える」ためのスキルに特化した授業を展開
- 徐々に「考える」以外にも「表現する」「協働する」等のスキルにも焦点をあてていく
- サイエンス科を担当した教員が徐々に変化し、自分の教科にもそのスキルを使用して、探求型の授業に取り組み始める
- 一方で、徐々にスキルに特化した授業は生徒の探求へのマインドを阻害していることに気付く
- 「考えたくなる」、「表現したくなる」、「協働したくなる」マインドの醸成の重要性に気付く
- 現在はスキルとマインドの両方を重要視した授業展開へと転換していく

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

- 生徒の主体性に大きく影響があり、生徒がさまざまなプロジェクトに取り組み始めるようになった
  例：学校保護宣言プロジェクト（2018 年 4 月 27 日朝日新聞掲載 「私の視点」）
  チャレンジカップ高校生部門最優秀賞 1 点、優秀賞 2 点、奨励賞 2 点
  チャレンジカップ「チャレンジカップ 2018 結果発表」https://www.challenge-cup.net/gp.html
- いわゆる知識注入型ではない授業展開がさまざまな教員、さまざまな教科で実施されるようになった
  例：中学 1 年、2 年でモデルコアカリキュラムの制定、全ての教科がアクティブラーニング型で実施
- 教科横断型の授業展開が広がりつつある

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

- 生徒が主体的に学びに取り組み、学外にも飛び出して、学びを深めている
- 教科の違う教員が協働して授業を作ることが一般化している
- パターンランゲージ、国際バカロレア等の新しい学びについて学び、深めている教員集団になっている

2つの評価方法			プロセス（形成）評価							パフォーマンス（成果）評価					総合評価（通知表）
1-A 社会総合		内容	授業取組 毎回評価	毎時 振り返り	映画観賞 シート	ケンブリッジ と社会総合	教科書 「問い」設定	プレゼン 評価シート	小計	プレゼン	レポート	定期試験（期末のみ実施）		小計	
		形態	ルーブリック	カード	プリント	プリント	プリント	ルーブリック と 考察		PPT、模造紙	ブック レポート	期末1/3	（期末100）		100段階
		配点	15	5	5	5	5	5	40	10	20	30換算	100	60	成績
1	●	女	14	5	5	4	5	4	37	7	16	20	65	43	80
2	●	女	13	5	5	4	5	4	37	8	19	16	52	43	80
3	●	男	12	5	5	4	0	4	30	8	12	18	60	38	68
4	●	男	11	4	0	3	0	4	22	8	7	18	59	33	55
5	●	女	12	5	5	4	5	5	36	7	16	11	38	34	70

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C-28**	部門 校内研修部門	学校名・氏名 津野町立葉山小学校
	活動名 チーム葉山で授業改善 「考え議論する道徳」の授業づくり	

課題の設定：

本校では、本年度より高知県から「道徳教育推進拠点校事業」の指定を受け、道徳の授業改善、評価の研究を行っている。しかし、本年度赴任した担任が約８割を占め、若手教員も５割を超える。そこで、学校組織として、全員が「道徳」に関わり、授業改善することで、教員の指導力向上を目指して取り組むことにした。目標は、「児童も教員も考え、語り合うことが楽しい道徳授業の構築」である。

方針・計画：

課題を解決するためには、次の３点が大切であると考えた。
①授業のイメージを共有すること。②教師の指導力を向上させること。③教職員全員が関わることで教師の充実感を高め、児童の意欲を引き出すこと。
これらの視点を生かしながら、研修の時間だけではなく、日々の授業で OJT を中心に行っていくことにした。

活動内容：

【校内研修の充実】（資料１）
　第１回、第２回の校内研修で、授業で目指したい児童の姿を確認し、実際に授業を見ながら、目指す授業を確認した。また、研究授業を各学年１回以上行った。授業後には、指導主事から授業づくりや評価についての講話を伺い、共通理解を図っていった。
【日々の道徳授業で授業改善】（資料２）
　日々の授業の前に、略案を作成して、事前研を行い、発問、板書、授業のねらいについて深めた。また、授業を管理職、道徳推進教師が参観し、授業の記録も筆記、映像、写真で残した。授業後には、事後研を行い、授業の振り返り、児童の見取りの共有を行い、次時への課題を明確にしながら授業改善を行った。
【アンケート調査の実施）】（資料３）
　児童と教員に意識調査のアンケートを行い、変容を分析した。

活動の成果：

【教職員】
◎授業のイメージをつかみ、自信をもって指導できる教員が増えた。
◎全員が授業をすることで、授業づくりに対する理解が進み、授業への工夫が見られるようになった。（授業に深まりが出てきた）
◎教職員間で道徳の授業に対する会話が多くなった。（担任でない教員も授業に自主的に参加・参観）
【児童】
◎道徳の授業が好きな児童が増え、自分ごととして捉え、発言したり、振り返ったりする児童が増えた。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

・日常的に、事前研、事後研も含めて、休み時間や放課後の 10 分～15 分のすきまの時間を活用し、OJT で授業改善を行っている。
・全教職員で関わり、組織で計画的に授業改善に取り組んだ。（学び合う雰囲気・人間関係づくり）
・ゴールイメージを共有することで、教職員のベクトルを合わせ、児童も見通しをもてたことで成果を挙げた。

資料１【校内研修の充実】

資料２【日々の道徳授業での授業改善】

【PLAN】 事前研 指導略案の作成・修正・検討（ねらい・発問・板書）
【DO】 授業実践 全時間、管理職と道徳推進教師が参観
【CHECK】 事後研 授業の振り返り（授業者のための評価（発問・ねらい）児童の評価（見取り））
【ACTION】 授業改善策 次の時間に生かす手立て

資料３【アンケート結果より】

【教職員のアンケート結果より】

	質問項目	４月末	９月末
1	道徳の授業のイメージをつかんでいますか。	67%	100%
2	自信を持って、指導していますか。	58%	92%
3	教材分析の仕方が分かりますか。	58%	100%
4	考える必然性のある発問、多面的・多角的に考えられる発問ができますか。	50%	75%
5	道徳の授業が楽しいですか。	67%	83%

【教職員の声より】
○事前研のおかげで、教材分析の仕方が分かるようになった。他の先生の考えも聞け、授業に幅がでるようになった。
○板書や価値の深め方、授業の展開の工夫について、理解が深まってきた。
○授業参観があり、多くの先生で子どもを見取ることができるのはとても有効である。
○他の先生の授業も見に行きたいし、自分も見てもらいたい。
○目指す授業の視点を教師も児童も意識することで、授業改善ができている。

教師の指導が変われば、児童も変わる。お互い目指す授業を共有したことで、成果に結びついた。

【児童のアンケート結果より】

	質問項目	４月末	９月末
1	道徳の勉強は好きですか。	92%	93%
2	道徳の授業では、自分の考えを伝えたり、ほかの人の考えを聞いたりしながら、自分のこと（生き方）についてよく考えている。	97%	95%
3	道徳の授業で、よかったところはどんなところですか。		

○友達の考えを聞いて、「なるほど」と思うところ。（80%）
○これからの生活や生き方について考えることができるところ。（77%）
○自分の経験を振り返って、発表できるところ。（76%）
○友達の考えとちがったいろいろな意見を出し合うところ。（76%）
○自分の思ったことをなんでも言えるところ。（75%）
○頑張ったら、褒めてもらえるところ。

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

<エントリーシート> ※事務局記入欄 **No.：C-29**	部門 校内研修部門	学校名・氏名 東京都立府中けやきの森学園
	活動名 地域連携と授業改善 ～授業 UD を共通のキーワードとして～	

課題の設定：

図１　学び合いのイメージ

特別支援学校では、小中高等学校に準ずる教育課程で学ぶ児童・生徒は、各学年１～２名となる。そのため、指導にあたる教員も数名になってしまうので、校内だけでは、教員間で学び合うことが難しく、教科教育における専門性の向上が課題となっていた。

一方、地域の学校では、多様化する児童・生徒の困難さや教育的ニーズに応じた適切な支援を考え指導するための、特別支援教育に関する専門性の向上が急務になっていた。そこで、互いの課題を地域のコミュニティを活用して解決していく取り組みを行った（図１）。

方針・計画：

地域のコミュニティを活用して、互いの専門性を融合させ、児童生徒の多様なニーズに応じた教育のための専門性を向上させる。

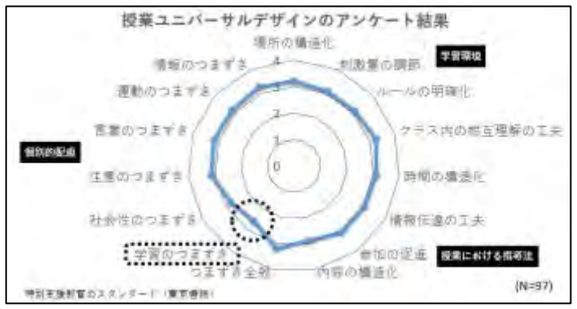
１年目（平成２８年度）教員の課題を明確にするためのアンケート調査の実施と各校の実践紹介
２年目（平成２９年度）対象の授業や研究会を設定し、より深く学び合う場を設定した実践
３年目（平成３０年度）研修会の共同開催を定着化する取り組み

活動内容：

１年目は、授業 UD の視点からみた課題を明確化するために、アンケート調査を実施した。その結果、本校では「学習のつまずきへの指導の工夫」の項目が他より低くなっていて、課題と感じている教員が多いことが分かった（グラフ１）。その課題を解決するため、地域の学校の教員から助言を受け、授業改善に取り組んだ（写真１）。

また、地域の研究授業へ参加し、特別支援教育の視点から助言を実施した。地域の５校の学校から研究協力を受け、連携しながら進めることができた。

グラフ１　授業 UD のアンケート結果



【地域の学校から特別支援学校への支援事例】

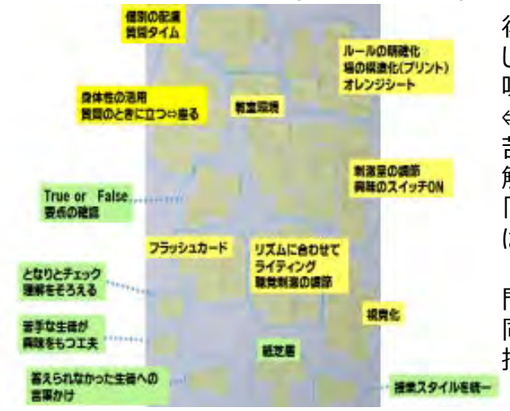
写真１　小学校算数科の授業改善への助言

写真１は、地域の小学校の先生を、本校肢体不自由教育部門小学部の「算数」の授業助言に招いた時の様子になる。この後、協議会を行い、特別支援教育の教員では、なかなか難しい専門性の高い助言をいただいた。また、授業視察、協議会には、本校外部専門家の言語聴覚士も参加した。あえて地域の先生と言語聴覚士が同席する機会を設定し、地域の学校の先生から助言をいただくだけでなく、特別支援教育ならではの科学的なアプローチを知っていただく機会とした。

２年目は、地域の学校の英語科の授業を特別支援教育の視点から分析を行い、学習のつまずきがある生徒にどのような支援が有効かを明らかにした（写真２）。

【特別支援学校から地域の学校への支援事例 】

写真２　授業 UD の視点(中学校英語科)



黄：意見が多かった内容　　緑：意見が少なかった内容

地域の中学校の専門性の高い英語科の授業分析後、各教員が取り入れてみたい授業のスタイルを書き出した。意見が多かったものには、「①刺激量の調節・興味のスイッチ ON」「②身体性の活用・質問のときに立つ⇔座る」等があった。一方、数が少なかったものは、「①苦手な生徒が興味をもつ工夫」「②要点の確認」「③理解をそろえる」「④答えられなかった生徒への言葉かけ」「⑤授業スタイルを統一」など、取り入れたくても、すぐにはできそうもないものであった。

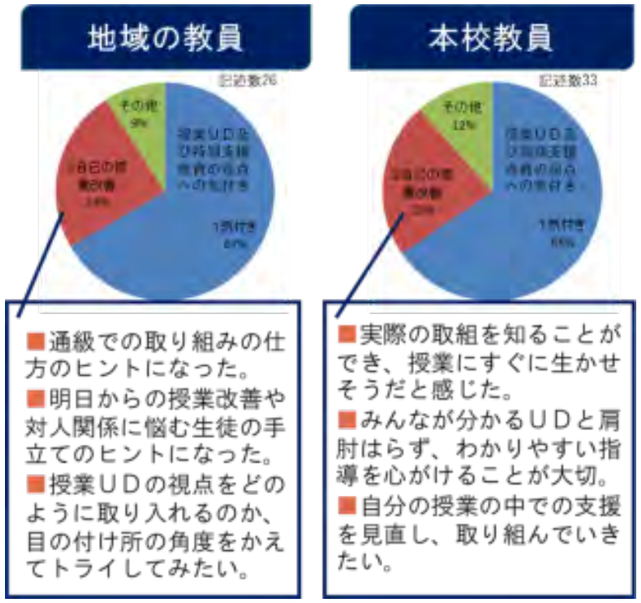
しかし、そこそこが、地域の学校と特別支援学校の専門性を融合させて築いていける「授業 UD」だと考え、合同研修会を積み重ね、若手教員が実施する国語科の授業改善への般化させることができた(写真 3)。

写真３　合同研修会の様子

２年目は、さらに研究協力校が 11 校に広がり、府中市教育委員会からも後援を受けた。協力校と研究授業を通して、専門性の融合が広がっていった。
３年目は、研修会での学びを深め、研究会を共同開催する計画が進行中である。

活動の成果：

グラフ２　合同研修会の効果に関するアンケート結果



互いの専門性を融合させ、授業改善を行う取り組みは ３ 年目を迎えた。研究の継続が、地域の学校との合同研究会開催の定例化につながったことは、大きな成果である。また、２年目に実施した合同研修会後のアンケート（自由記述）を分析すると、地域の教員、本校の教員ともに「授業 UD 及び特別支援教育の視点への気づき」「自己の授業改善に生かす」の内容が、ほぼ同じ割合になった。この結果から、地域のコミュニティを活用した教員間の学び合いが、互いの授業改善、専門性の向上へとつながる取り組みになることが明らかになった。

今後も、特別支援教育の専門性を高めながら、地域の学校との学び合いを継続しシステム化することが、地域のコミュニティを生かした連続性のある多様な学びの場の提供につながり、インクルーシブ教育システムの構築の土台となると考える。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

・地域と連携した教員間の学び合い　・授業ユニバーサルデザイン
・特別支援教育と教科教育の融合　・研究会の共同開催の定着化

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞

※ 事 務 局 記 入 欄

No.：C-30

部門
校内研修部門

学校名・氏名
寝屋川市立石津小学校

活動名
特別の教科道徳への転換
チーム学校の指導と評価の一体化

課題の設定：

平成 25 年度より「道徳の時間」の学習評価は「授業に対する評価と「児童に対する評価」の２つの評価観点を学習指導案上に示し、前者を指導方法研究に、後者を児童への励ましに活用しながらそれらを統合して授業改善につなげる手法をとってきた。平成 27 年度より本校独自の「道徳ノート」を作成し、現在はそれが基になり寝屋川市全体で活用するが、児童のふりかえりから何をみとるのかが、まだまだ不十分であるためその活用の充実が授業改善と共に本校の課題となっている。

方針・計画：

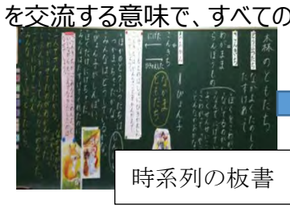
児童が「授業のふりかえり」として記載したノートを分類・分析を実施し、加えて、何をもって個々の児童がねらいとする価値に迫ることができたのかを研究することで、個々の教員の授業改善も進む。その上で、平成 29 年度末にはすべての児童に対して評価を行い、それを学校全体で分析を基に、その根拠を確認し本校がめざす特別の教科 道徳の評価につなげていく。

活動内容：

(1)石津小学校の「道徳科の評価」の在り方とその方法についての指針を示す
(2)学年で児童の「道徳ノート」について①ねらいとする価値に迫ることができたと考えられるもの②ねらいとする価値に対する理解、自覚が不十分なものに分類しその根拠を示した上で、②については担任がコメントによりおって問い返しを行う。さらに、学期ごとに児童に対して自身の学びを振り返らせた上で、①児童が特に考えを深められた授業に対する記述②授業の積み重ねの中で、（同一内容項目）みられた変化や成長に対する記述に対する分類分析 **(3)** (1)・(2)を研究、検証の上で「考え・議論する道徳」の授業改善と授業公開を実施

活動の成果：

授業から児童の学びの姿をみとることは、自身の授業のふりかえりにもつながる。その上で、教職員の板書が時系列でものから、あらかじめ授業のねらいを強く意識するために構造的なものに変化してきている。さらには、それを交流する意味で、すべての授業の板書を写真にとりため、校内掲示をしている。


時系列の板書

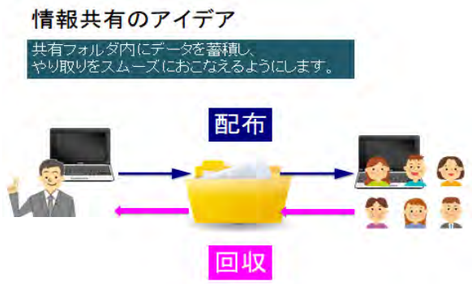
構造的な板書

全学年板書掲示

アピールポイント（アイディアや工夫）：

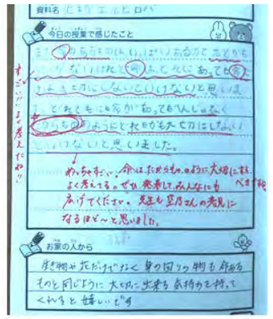
・道徳教育の研究は 10 年目で、研究を支えてきたものは、継続的な教職員の研修であること
・「生」の授業を通して具体的な実践を学ぶものと、道徳科の目標、構造、内容項目について学び、資料(教材)分析や発問構成を論理的に考える理論研修の両輪ですすめていること
・つねに根拠を提示し、感覚によらない研究を行うこと ・ICT を活用して校内での共有をはかり一般化すること
・府内全体、市内全体、中学校区、保護者・地域に開いた授業公開を行うこと

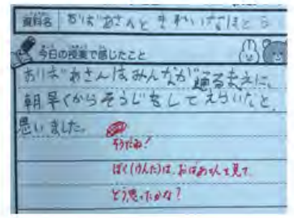
・講師の招聘
・場の設定
・事前事後の計画
・研修内容の拡充
etc...



各年度の地域授業公開研究テーマ

平成26年度	文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官（当時）	赤堀博行 氏	教科化に向けた国の動向
平成27年度	元文部科学省初等中等教育局視学官　国学院大学教授	杉田 洋　氏	道徳と特別活動との関連について
平成28年度	道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議　副座長　兼央大学教授	島 恒生 氏	「道徳科」の実施に向けて
平成29年度	四天王寺大学　准教授	杉中康平 氏	「道徳科」の評価について
平成30年度	文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官	浅見哲也氏	道徳科の質的転換と量的確保

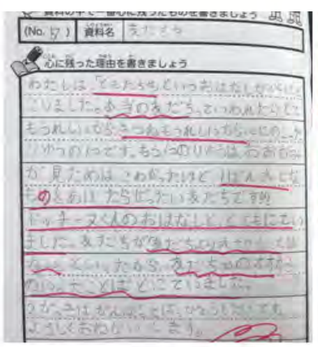

ねらいとする価値に迫ることができたと考えられる例


ねらいとする価値に対する理解、自覚が不十分であり、教師がコメントによって追って問うている例

より考えを深めさせるための手立てとして

児童が自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていくために学期ごとに自身の学びを振り返らせる。
このことによって、特に心に残った学習を想起し、児童が今の自分、そして今後の自己の在り方について立ち止まって考える様子も見られる。

1学期全体を通してのふりかえり


複数の資料、内容項目について比較しながら統合的に考える、同一内容項目をねらいとした教材、学習を比較し合うことで、価値の自覚が深まるといった展望も開けつつある。

学期ごとの振り返りの中で、これまでに学習した同じ内容項目の資料と比較等によって価値の自覚を深めようとしているもの

<エントリーシート>

※事務局記入欄

No.：C-31

部門

校内研修部門

学校名・氏名

八幡市立美濃山小学校・藤原由香里

活動名

授業研究システムの開発
活動試行・模擬授業 WS・追体験

課題の設定：

本校には、研究授業に向けて学年や低中高学年のブロックで連携し、協働的に授業開発を行う風土がある。研究授業の際には、複数回に渡って事前事後の検討を行い、実践を練り上げる授業研究を行ってきた。しかし、事前に検討を重ねても、実際の授業でうまくいかないことが多く、大きな変更が必要となることが度々あった。その原因としては、教師目線の発想で授業を考えがちであるため、思い描くように授業が展開しづらいこと、打ち合わせが言葉のやりとりに頼りがちであるため、メンバーそれぞれの抱くイメージが食い違ってしまうこと等が考えられた。

そこで、重点研究推進部のメンバーを中心として、授業研究システムの開発・校内研修改革に取り組むこととした。具体化にあたっては、校内研修の講師として招聘した東京学芸大学教職大学院・准教授渡辺貴裕氏による提案「教師の学習者としての感覚を活かすこと」「児童と教員の学び方の同型性を意識すること」という２点を踏まえながら実施することとした。

方針・計画：

平成 29・30 年度の本校の重点研究テーマは「表現活動を取り入れた主体的・対話的な授業の創造ー表現しながら理解を深める学習者を育てるー」である。主に、演劇的手法を活かした授業改善」に取り組むことになっていた。演劇的手法とは、上演を目的とせず「誰か・何かに“なってみる”」「状況や立場に身を置いてみる」ことを通して思考を深める学習方法の一つである。研究主題は、主に授業の中で演劇的手法を効果的に取り入れることで、児童が学習への理解や自己理解、他者理解を深めることを目指すものであった。そこで、授業づくりの過程で児童と教師の学びの「同型性」を保ち、児童の学び方を教師自身も実際に行ってみる、つまり、学習者の立場に「なってみる」という演劇的な体験を取り入れることとした。年間３回の校内での公開授業と、１年に１回実施する研究発表会での公開授業に向けた授業研究において、「学習者になってみる」という活動を取り入れることを計画した。

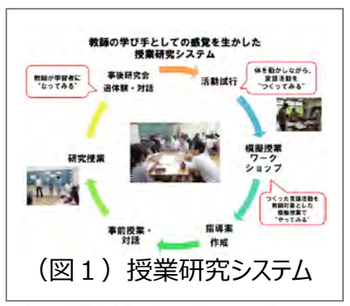
活動内容：

授業研究のシステムとして、次の３つの場面において、教師が学習者の立場に”なってみる”という活動を取り入れた。

（１）「活動試行」・・・授業構想の段階で、実際に身体を動かして場面を作ってみたり、演劇的手法を使ってみたりしながら、教材研究をし、言語活動を創造していくこと。

（２）「模擬授業ワークショップ（WS）」・・・教職員を対象として、実際に授業を実施してみて、学習者としての実感を出し合い、より学びが深まるよう、活動を練り直していくこと。

（３）「追体験」・・・・研究授業後の事後研で、授業で児童が行なっていた言語活動を実際に体験してみて、そこでの実感を拠り所に授業の意味を語り直していくこと。



（図１）授業研究システム

この３つを授業研究システムとして図に表すと（図１）のようになる。このシステムにそって、教師が学習者の立場になって感じた感覚を拠り所にしながら授業研究を行うこととした。

特に意識した点は、指導案の作成を、模擬授業ワークショップ後に行う、という点である。先に指導案を作成し文書にしてしまうことで、教師自身の思考が固まってしまいがちであること、体を動かす前に文字にすると、実際に授業した時のずれが大きくなってしまうことを回避するため、模擬授業後に位置付けることにした。

模擬授業ワークショップには、次のようなポイントがある。

・授業の細部は決まっていなくてもよいので、体を動かして、実際に教師役と児童役に分かれて授業を行ってみる。
・授業の中で、「今の方法だと、意見が出しにくいので、こうしたらどうか」というように、学習者としての実感を出し合い、
その場で別の方法を積極的に試してみるという方法をとる。

こうすることで、教師の学習者としての感覚を活かしながらクリエイティブな発想で授業を組み立てることができるようになった。その後、指導案を作成し、研究授業を実施し、事後研究会を行う。ここでは、授業者と授業学年による簡単な感想や説明の後、研究授業を再現し、参加者は児童役としてその日の授業での児童の活動を「追体験」する。追体験は、次のようなステップで進めた。

（写真１）授業研究の様子

(1) 授業者がその日の中心となる活動を再現し、参加者は児童役として、実際に活動を行う。
(2) その後、学習者になってみての実感を語り合う。
(3) さらに、追体験をした実感を踏まえて、今日の授業について語り合う。

追体験をすることで、参観していただけでは感じられないこと、見えなかったものが見えるようになる。授業の良し悪しを語るのではなく、自分自身の学習者としての実感を語ることができるようになった。そのことにより、授業についての再発見があったり、自分自身の「とらわれ」や「授業観」に気付いたりするような対話が生まれるようになった。

活動の成果：

成果は、大きく次の３点である。

（１）教職員の授業・児童・教材への理解の深まり
（２）教職員のよりよい関係性の構築
（３）教職員の学習者としての感覚を活かした創造的な授業実践事例の蓄積と発信

平成 29 年 12 月に、全教職員対象とした研究についてのアンケートを実施した。その中で「授業を考える段階、または見た後に教師自身も学習者の立場に“なってみて”活動を追体験する体験は、授業づくりや児童理解、教材研究の助けになった」という設問に対し、「１とてもそう思う」と回答した割合が79%、「２少しそう思う」と回答した割合が18%と、多くの教職員にとって、学習者の立場になってみることが肯定的に受け止められていることがわかった（グラフ１）。

（グラフ１）

他にも、自由記述項目やインタビュー調査の結果、次のような回答が寄せられた。

・これまでの事後研究会では、経験があまりないので、授業について意見が言いにくかったが、現在のように児童役になって追体験した実感を語る形だと、自分の感覚で意見が言えるので、話しやすくなり、事後研への参加が楽しくなった。職員との仲もよくなった。（20 代教諭）
・教員ではないので、授業づくりに口を出すことがためらわれたが、今の方法だと、自分の感じたことを話せるので参加しやすい。（60 代学校図書館司書）

研修全体を通しては、「一人で抱え込まず、たくさんの教師の感覚や声を吸い上げて協働的に指導案を作成できる」「前もって模擬授業を体験しているので児童の学びの様子を観察しやすく、授業者のねらいもよくわかる」といった意見が得られた。さらに、実践事例が多数生まれ、それらが他校の教員によって実際に活用されていることも、成果としてあげられるだろう。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

・教職員が自ら演劇的手法を体験しながら授業改善を楽しむ様子に感銘を受け、他校・他府県からも視察に訪れる参観者が絶えない。
・外部からの参観者や演劇的手法を活用している実践者が日常の校内研修に参加することで、研修がより刺激的で活気に満ちたものとなっている。
・教師が学習者になってみる体験は新たな授業事例を創造する好循環となり、豊かな実践事例が蓄積され、学校ホームページでの発信によって他校の教員にも活用されている。

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C-32**	部門 校内研修 部門	学校名・氏名 徳之島町立母間小学校
	活動名 遠隔授業で複式指導を充実 小規模校で高め合う徳之島型モデル	

課題の設定：

複式指導においては，１人の教師が２つの異なる学年を同時に担当する関係上，教師と児童が対面する時間が少ないために児童の主体的・対話的な学習を設定しにくく，詰め込み型の授業になりがちという課題がある。そこで，複式学級を有する小規模校同士で，同時に２つのテレビ会議システムを活用して接続し，日常的に実施することで，複式指導における課題の解決と学びの質の向上を目指した。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

複式学級を有する２つの学校同士で，１つの教室の中に２つの遠隔合同授業を実施し，両校の担任がそれぞれ１学年ずつを主として担当する。(写真 1,図 1,写真 2)距離を超えて同学年同士を一つの学級と見立てた仮想単式学級ともいえる複式双方向型の遠隔合同授業の実施に当たって，以下の仮説を設定し，多くの実践をもとに検証し，その効果を明らかにした。

(1) 教師と児童が直接対面する機会が増加し児童の主体的な活動を促す支援が可能となるのではないか。
(2) 遠隔合同授業に適した単元や場面を設定することで学びの質が向上し，児童や教師の意識，学習効果に変化が見られるのではないか。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

・三校合同研修会(年間７回)の実施による遠隔合同授業実施単元の精選と指導計画作成
・複式双方向型指導モデル(図 2)の策定と学習状況の把握の具体策(写真 3,4)検討
・三校の担任全員による遠隔合同授業の実施と相互授業参観による授業研究
・日常化に向けた工夫や対策検討（校時表・教材の統一，打合せの簡略化，学習規律の統一）

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

・教師と児童が直接対面する時間がほぼ２倍に増加し，時間的な余裕ができて，個別指導の充実や主体的・対話的な学習の充実が図れた。（図 3）
・複数の授業を担当する負担が軽減し，きめ細やかな指導ができた。学力向上に対する成果(図 4)も出ている。(紙面上紹介できないが，NRT や CRT の結果も向上)
・学校を超えた教師間の交流や受信側の児童を意識した授業展開を考えることで指導技術を高めることができた。
・児童についても，多様な考えに触れ，自分の考えと比較しながら理解を深めるようになり，発表する機会を増やすことで，相手意識をもって表現することができるようになった。(写真 5)

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

・遠隔合同授業を実証の中心としながら，児童の直接交流活動や職員間の相互研修など対面の交流も重視し，小規模校同士が双方向でつながり合い，１つの大きなバーチャルクラスルームとして高め合っている。
・複式双方向型指導モデルについては，様々な教科で使用可能な汎用性のあるものとした。これまでの複式指導の良さＩＣＴ機器活用の両方の利点を取り込んでいる。
・３年間の継続研究により，遠隔合同授業に適した単元や指導例が蓄積とタイプ別のステップ化(表 1)により，新規参入校や初めて遠隔合同授業に取り組む教師も，スムーズに研究に加わることができる。

＜写真、図表添付欄＞写真 1

図 1

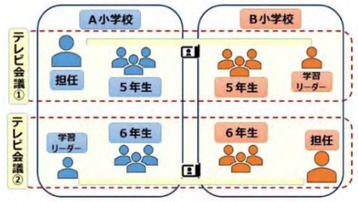


写真 2

写真 3

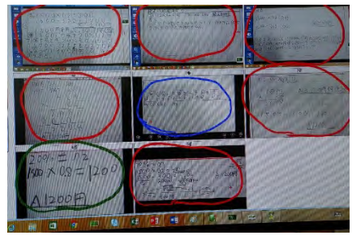


図 2

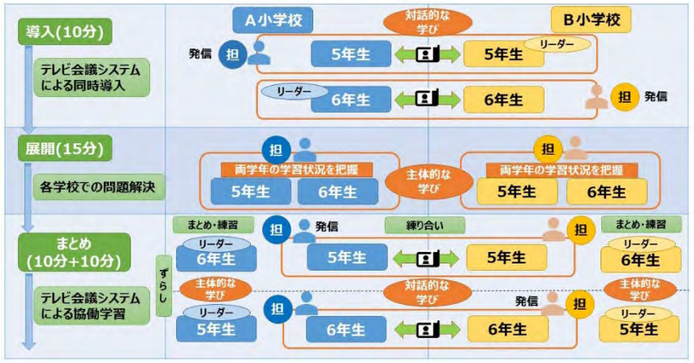


写真 4

図 3

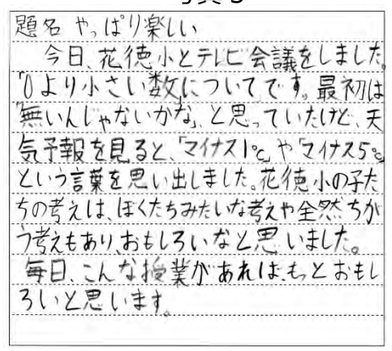
図 4

		国語A	国語B	算数A	算数B
H28	本校正答率	57.3	51.1	66.3	26.2
	全国差	-15.6	-14.3	-11.3	-21.0
H29	本校正答率	74.0	39.0	86.0	47.0
	全国差	-0.8	-18.5	+7.4	+1.1
H30	本校正答率	81.0	67.0	76.0	80.0
	全国差	+10.3	+12.3	+12.5	+28.5

表 1

	遠隔合同授業タイプ	使用機器（コスト）低 中 高	教科等	学習内容・活動内容
ステップ５	複式－複式（複式双方向型） テレビ会議２セット以上必要	タブレット＋スカイプ／テレビ会議専用機（UCS）／電子黒板	国語 社会 算数	多様な意見や考えの交流 児童同士の交流
ステップ４	複式だが一方のみ複式－単学級		国語 社会 算数	意見や考えの交流 話し合いや議論
ステップ３	多地点 多地点接続は専用機が望ましい	必要ライン	外国語 社会	コミュニケーション力の育成 ゲストティーチャーの話を聞く
ステップ２	単学級－単学級	タブレット＋スカイプ／テレビ会議専用機（UCS）／電子黒板	国語 算数 道徳 外国語	意見や考えの交流 話し合いや議論 コミュニケーション力の育成
ステップ１	単学級－単学級 ステップ1～2は，コストも低く手軽に実施可能		国語 生活 音楽	作品発表 音読発表 音楽発表

写真 5


題名 やっぱり楽しい
今日、花徳小とテレビ会議をしました。
0より小さい数についてです。最初は
無いんじゃないかな、と思っていたけど、天
気予報を見ると、「マイナス1℃」や「マイナス5℃」も
という言葉を思い出しました。花徳小の子た
ちの考えは、ぼくたちみたいな考えや全然ちが
う考えもあり、おもしろいなと思いました。
毎日、こんな授業があれば、もっとおもし
ろいと思います。

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：C-33**	部門 ３．校内研修部門	学校名・氏名 大阪市立三軒家東小学校
	活動名 若手教員研修　F.T.M 対話性の保証を生かした授業検討会	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

本校は、管理職・育休中・病気休暇中の教員を省くと、半数以上が、正規採用 5 年目以下の教員である。若手教員の授業力向上は喫緊の課題である。また、子どもたちが「主体的・対話的・深い学び」をするために、教員自身が「めあて」にそった子どもの意見の出し方・深め方・まとめ方、教科の内容を学ぶことが求められる。教務主任がファシリテーターとして、教員同士が「学び合う」という研修スタイルの『F.T.M(フレッシュ・ティーチャーズ・ミーティング)』を行う。勤務時間中の校内研修の一つとして位置づけ、若手教員の参加は必須である。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

・本校では子どもの学力・体力の向上と教員の参画意識を高めるために、平成２８年度より毎月定期的に「学力・体力向上委員会」を位置付けている。「学力向上委員会」の「授業力アップ推進部会（教務主任・中堅教員メンバーで構成）」において、『F.T.M』の課題について検討する。
・一昨年は講義形式の研修が多く、昨年度は模擬授業を中心に行った。今年度は、普段の授業を録画し、録画したものを材料に、ファシリーテーターを活用し、対話を生かした授業検討会として『F.T.M』を行う。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

・指導案を作成していない若手教員の普段の授業を録画したものを検討材料とする。
・教務主任がファシリテートをしながら、若手教員が録画した授業の検討会『F.T.M』を実施した。子どもの意見を拾えていない場面・深められていない場面では、録画を一時停止し、参加者で検討していった。「授業力アップ推進部会」は、F.T.M に参加し、アドバイスをした。
・文部科学省（国立教育研究所）総括研究官の千々布俊弥さんにも若手教員の授業観察・指導を終日していただいた。（写真２）（写真３）後日、教頭が千々布先生に触発され、若手の頃の授業記録を用いて「主体的・対話的・深い学び」の学習スタイルについて『F.T.M』で発表した。（写真４）（写真 5）

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

『F.T.M』の若手教員メンバーからは、「人の授業を見る機会が少ないので新鮮で、自分ならこうするという考えができる。」「他の先生方の考えや意見が聞けるので勉強になる。」「他学年の学習（つながり）がわかる。」という感想があった。アドバイザーからは、「自分自身の授業を振り返ることができる。」「課題のあるところをＶＴＲでとめて、色々な角度から助言を受け、授業者でなくても、わかりやすいと思う。」という感想があった。教頭が発表した『F.T.M』について、若手教員から「（子どもの）自尊心が高まりそうな実践がたくさんでした。」「正解がないから教員の教材研究やいろいろな発想を出すための工夫が大切だと思った。」という感想があった。

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

・研修実施後は、毎日の閲覧数が平均 100 を超える「学校ホームページ」のカテゴリ『授業研究会・教員研修会』に即日アップし、児童・保護者だけでなく一般市民にも周知している。（写真６）
・子どもの「学び合い」をめざして教員同士で「学び合い」を行うことで、教員自身も「学び合い」の良さを実感でき、良いサイクルとなった。教員が、子どもの意見をファシリテートする技量を学んだ。
・『F.T.M』に中堅教員も参加し、校内研修として位置づけているので、ミドルリーダーの育成にもつながった
・『F.T.M』では、若手教員が普段悩んでいる指導法についても、ざっくばらんに対話できる雰囲気があった。

＜写真、図表添付欄＞

写真　1

写真２

写真３

写真４

写真 5

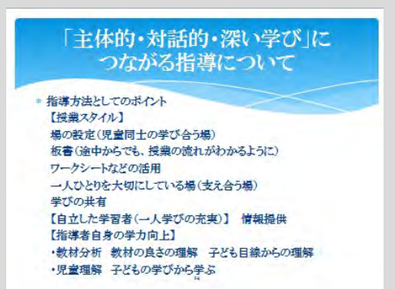


写真 6

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

<エントリーシート>

※ 事 務 局 記 入 欄

No.：C-34

部門

校内研修部門

学校名・氏名

大津市立日吉中学校
校　　長　田川　学
研究主任　苗代峻平

活動名

地域と育てる確かな学力
新たな教育に向けた土台づくり

課題の設定：地域ぐるみで学力向上に取り組むことで地域の後継者を育てる

校区の課題解決のために 40 年前に発足した「日吉学区教育総合推進会議」(日吉学推)は、人権教育を基本に子どもたちに学力をつけることに取り組んできた。保幼小中高の教員と関係機関が学推を通じて学力向上プランを地域に発信することで、保護者、地域も地域人材育成のための学力向上に取り組めると考えた。

方針・計画：学校・保護者・生徒が作った学力向上モデルを発信し地域ぐるみで学力向上を図る

教え込むという教師目線を払拭するため企画段階から生徒、保護者が参画し生徒、保護者も馴染みやすいデザインを目指した。また、日吉学推や事務局会議などで保、幼、小、中、高の教員が直接、協議することで子どもの実態に即した学力モデルとなり地域にもアピールしやすいものになった。

活動内容：日吉学推を通じて活性化する校園連携と各校園の学力向上の取り組み

日吉学推の「学ぶ力部会」部員が協議し学力向上モデルを作成した。11 月の授業交流集会では、日吉中学校がモデルに基づいた授業を提供し幼児期から高等学校までの一貫した視点で協議を深めることができた。また、このモデルが校区内の学校、関係機関に掲示されることで育てたい子ども像が保護者、地域関係者に共有されるとともに、各校園が学力向上に取り組む道しるべとなった。

活動の成果：保護者の参加が子どもの進学へのあこがれを高める

保護者がモデルづくりに参加することで保護者、子どもの学力観を踏まえたモデルになり校園との連携が緊密になった。子どもたちはそれを元に将来に見通しを持つことができ、上級生の学びにあこがれを持つことができた。モデル作りに関わった保護者からは「この取り組みを通して、自ら学びに向かい、学んだことによって自分に何が得られたかが実感できる子どもに育ってほしい」と言う声が聞かれた。

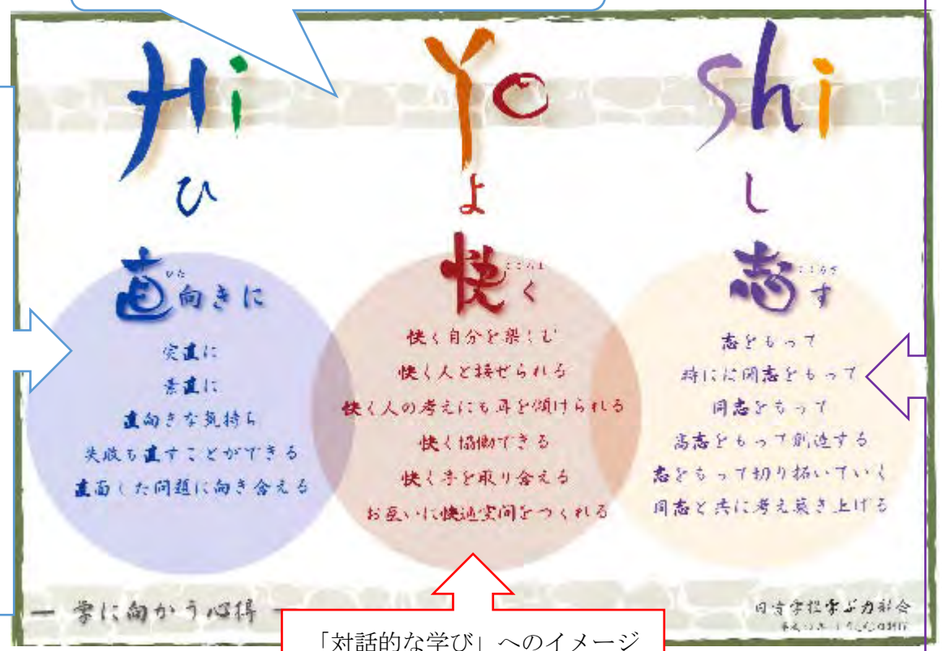
アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

・様々な石を組み合わせて強固にする穴太衆積みのイラストを取り入れ、一人ひとりを生かす教育理念を表現した。
・穴太積みは地域に残る世界的な遺産であり、これを用いることで独自の発信力を生かすことができる。
・保護者、生徒がモデル企画に関わり広い視点から主体的、対話的で深い学びの姿を具体化した。
・今後も地域、子どもの実態に即してアップデート出来るよう柔軟な取り組みを継続していく。

<写真、図表添付欄>

大企業の企業理念・企業ビジョンなどを参考（トヨタグローバルビジョンなど）にし、１つのことに縛られるのではなく、どんな価値観を大切にしたいのか、生徒自身が自分たちのあるべき姿、目指すべき道をイメージできるものを目指した。

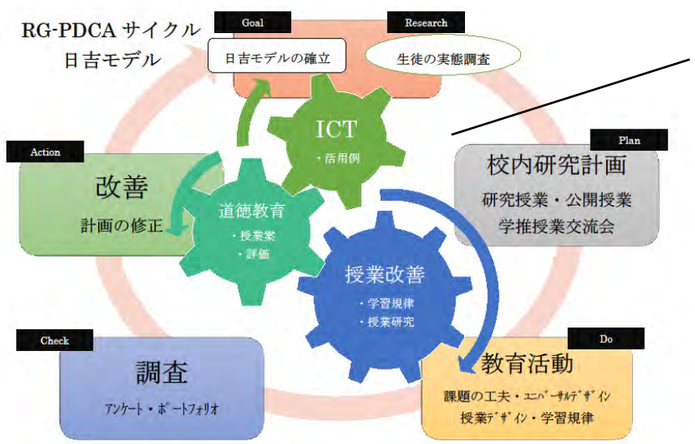
実際の穴太衆積みの写真をイラスト風に加工



「主体的な学び」へのイメージ
青色で爽やかなポジティブさを表現

「深い学び」へのイメージ
紫色が２色を混ぜ合わせてできることから創造を表現

「対話的な学び」へのイメージ
赤色で暖かさを表現



研究構想図

・学力向上に向けた土台作りとして校内研究として提案
・１学期に２回、夏休みに１回、２学期に２回の部会で検討
・１１月に授業交流を実施。保幼小中高の教員が合同で授業参観と協議会に参加